

2025 年度 海外研修報告書

団長・副団長挨拶

2025 年度 海外研修団長 岡崎 匡輝

副団長 窪山 堅斗

奥原 蒼葉

今年度の現代福祉学部海外研修の団長・副団長を務めさせていただきました、岡崎と窪山と奥原です。私たち 20 名の研修生は、事前学習とガイダンスを経て 8 月 30 日から 9 月 7 日の移動日を含めた 9 日間、海外研修に参加しました。今年度も昨年度と同じ一団体制での研修となりましたが、昨年度における一団の人数が 30 人であったのに対し、本年度は 20 人の体制で研修に参加させていただき運びとなりました。また、今年度の海外研修は私たち 2 年生の他 3 年生も参加し、2 年生と 3 年生の合同で研修を行いました。この報告書を通じ、私たちが現地で得られた学びや、人々との交流といった海外研修の様子を伝えられたらと思います。

私たち研修生は、6 月の中頃から訪問先であるスウェーデンについての理解を深めるため、現地ガイドさんのスウェーデンについての講義や、事前学習を行いました。本年度における事前学習は、「スウェーデンにおける地域開発」「スウェーデンにおける福祉政策」「スウェーデンにおける障害者教育・雇用」「スウェーデンにおける心理職の活躍について」そして「スウェーデンの育児・教育政策について」のこれら 5 つのテーマを、5 グループに分かれて、グループごとに文献やインターネットを用いて各々のテーマについて調べ、最終的にそれぞれのテーマについて分かったことや、自分たちなりの考察を交えたプレゼンテーションを行い、そこで得られた疑問点や、新たな考察を共有し合いました。更に、京王観光の方々からスウェーデンの渡航前に確認しておくべき重要事項や、注意点、緊急連絡先の共有、危機管理における心構えなどを共有して頂きました。我々が何事もなく日本に帰国できたのも、こういった注意喚起あってこそそのものであったのではないかと思います。ご協力いただいた京王観光の皆様や、引率の先生方、現地ガイドのエミルさんにこの場を借り、研修生を代表して心から感謝申し上げます。

実際、スウェーデンのストックホルムに到着してみると、そこには気候もさることながら、日本とは全く違う雰囲気を持つ街並みが広がっており、我々はそこで暮らす人々の暮らしを身近に感じ、インターネットでは知ることができないような、スウェーデンの現地の様子・現地の人の声を見聞きし、有意義な学習の時間を得ることができました。駅ごと

に異なる装飾がなされた地下鉄、日本には存在しない Fika の文化、家を出てすぐに広がる自然と共に生きる人々…、スウェーデンへの海外研修は事前学習を行ったことで、おそらくこの大学で最もスウェーデンについて詳しくなったであろう我々にとっても驚きと学びの連続であったように感じられ、その感動の全てをここに書き出すことは到底出来ません。中でもスウェーデンの風土により醸造された独自の福祉制度には、スウェーデンを「世界有数の福祉大国」たらしめる要素が多く見られ、すべての人が心豊かに暮らせる「ウェルビーイング」の実現を思考する、我々現代福祉学部にとっては大きな学びとなりました。スウェーデンで学んだ「ウェルビーイング」を日本社会で実現する様々なヒントは、より良い社会を作ってゆく我々の良き道標となるでしょう。

最後に、今回の 2025 年度現代福祉学部海外研修にご尽力していただいた、学校関係者の皆様、旅行代理店の皆様、引率の先生方、学校関係者の皆様、現地ガイドのエミルさんへ改めて研修生一同を代表し、心よりお礼を申し上げ、団長・副団長の挨拶とさせていただきます。皆様、本当に有難う御座いました。



中川莉那



平野佐奈



齋藤愛莉



中野杏那



安原奏美



檀上蒼



川崎舞花



スウェーデン研修メンバー



萩野依那



五十島佳穂



須藤茜



一本槍優来



渋谷明日香



奥原蒼葉



窪山堅斗





若狭柊弥



田中天琉



福岡友陽



岡崎匡輝



夏涵沁



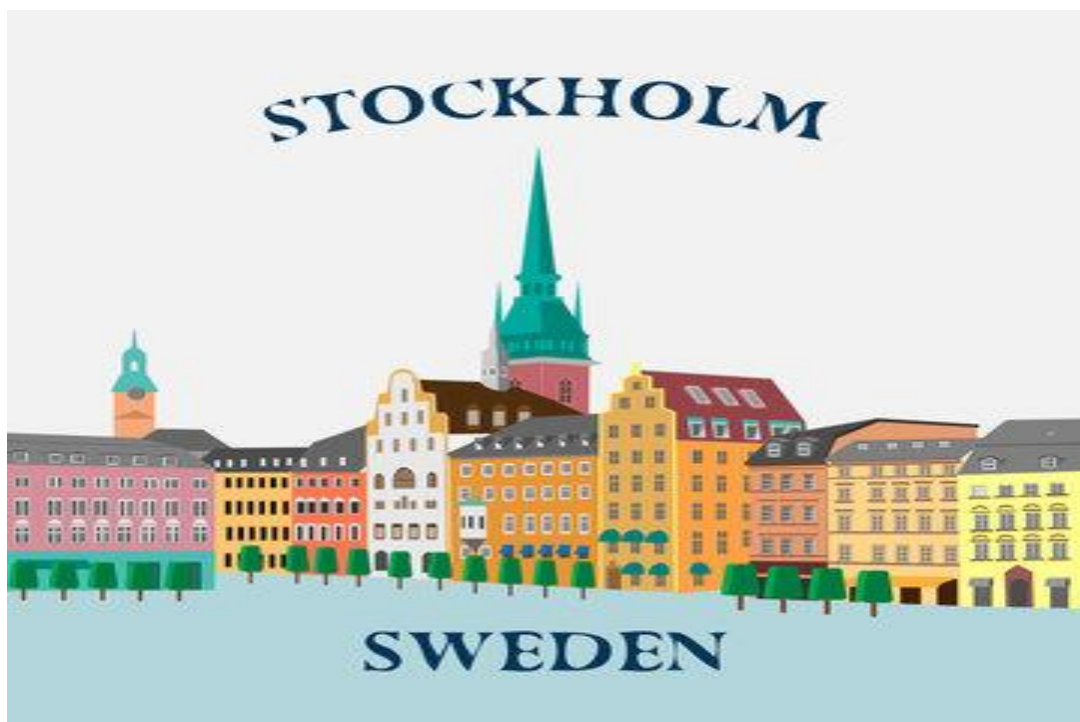
三浦凜香



金慧英先生



野田岳仁先生



2025 年度現代福祉学部海外研修報告書 目次

団長・副団長挨拶	02	
研修参加メンバーの紹介	04	
【グループ報告】		
●現地研修報告		
スウェーデンの概要・文化的特徴	07	
ティレソ・コミュニケーション	10	
ニュプシエルス・プレスクール	13	
カロリンスカ大学病院小児病棟	16	
ロイヤルシーポート地区	18	
小学校訪問	20	
エコツーリズム	23	
知的障害者のための高等学校訪問	27	
若い心理療法士の働くクリニック	28	
スウェーデンの学生との交流会	29	
●事前学習報告		
地域開発班	30	
福祉政策班	32	
障害者福祉班	35	
心理職班	38	
育児・教育班	40	
【個人報告】		43
教員挨拶	71	
7 日間の記録	73	

スウェーデンの概要・文化的特徴

田中天琉 平野佐奈

1. スウェーデンの基本情報

国名：スウェーデン王国 (Kingdom of Sweden)
首都：ストックホルム
位置：北ヨーロッパ (スカンディナヴィア半島東部)
面積：約 45 万km²
人口：約 1,050 万人
言語：スウェーデン語 (公用語)
通貨：スウェーデン・クローナ (SEK)
政治体制：立憲君主制
元首：国王
気候：冷帯。冬は寒冷だが、夏は比較的過ごしやすい



スウェーデンは高福祉国家として知られ、医療・教育・子育て支援などの社会保障制度が充実している。医療や教育は原則として無償または低負担で提供され、家庭の経済状況に左右されにくい仕組みが整えられている。また、育児休業制度が充実しており、男女ともに育児に参加しやすい環境が整備されている点も特徴である。さらに、男女平等や子どもの権利を重視する政策が進められており、子どもを一人の権利主体として尊重する考え方が教育や福祉の現場に根付いている。これらの取り組みから、スウェーデンは教育分野・福祉分野の先進国として世界的にも注目されている。

2. 文化的特徴

(1) フィーカ (fika)

フィーカとは、スウェーデンで日常的に行われているコーヒーブレイクの習慣であり、人々の生活に深く根付いた文化の一つである。単なる休憩時間ではなく、心身をリフレッシュさせると同時に、人と人とのつながりを大切にする時間として位置づけられている。フィーカという言葉は、コーヒーを意味するスウェーデン語に由来するとされ、その起源は19世紀頃までさかのぼる。

フィーカは一日の中で、午前10時頃と午後3時頃に設けられるのが一般的である。この

時間には、コーヒーや紅茶などの飲み物に加え、シナモンロールやクッキーなどの甘い菓子、あるいは軽食をともに楽しむ。スウェーデンはコーヒーの消費量が多い国としても知られており、こうした飲食を囲む時間は日常生活の一部として自然に取り入れられている。

フィーカにおいて最も重視されているのは、「コミュニケーション」である。職場では、上司や同僚が肩書きや立場を気にせず、対等な関係で会話を交わす機会となる。仕事の合間に雑談をすることで、緊張が和らぎ、職場の雰囲気や人間関係の改善につながると考えられている。また、家庭や友人関係においても、フィーカは互いの近況を語り合い、関係を深める大切な時間として機能している。

さらに、フィーカは個人の幸福感や生活の質を高める役割も果たしている。忙しい日常の中であえて立ち止まり、ゆったりとした時間を共有することは、ストレスの軽減や心の安定につながる。このような価値観は、効率性だけでなく人間らしい生活を重視するスウェーデン社会の特徴をよく表している。

このようにフィーカは、飲食を伴う休憩という枠を超え、人間関係の形成や社会的なつながりを支える文化的慣習である。スウェーデンにおいてフィーカは、日常生活の中で欠かすことのできない重要な時間として、多くの人々に大切にされている。

(2)食文化

スウェーデンを代表する食べ物として、ミートボールとシナモンロールが挙げられる。これらは日本でも IKEA や北欧風カフェなどを通して知られるようになったが、スウェーデンでは日常生活の中でより身近な存在である点に違いがある。

まず、ミートボールはスウェーデンの家庭料理として広く親しまれている。特別な料理というよりも、日常の食事として家庭や学校、職場の食堂で提供されることが多い。付け合わせとしてマッシュポテトやクリームソース、リンゴンベリーのジャムが添えられるのが一般的であり、肉料理に甘みのあるジャムを組み合わせる点が特徴である。一方、日本の肉料理では、甘辛い味付けはするものの、果実のジャムを添えることはあまり一般的ではなく、味の組み合わせに文化的な違いが表れている。

シナモンロールはスウェーデンの国民的なお菓子として知られている。家庭で手作りされることも多く、日常的に食べられている点が特徴である。甘さは控えめで、スパイスであるシナモンの香りを重視した味わいとなっている。これに対し、日本で親しまれている菓子パンは、砂糖やクリームを多く使った甘みの強いものが多く、味の好みに違いが見られる。

また、日本では菓子やパンは「間食」や「ご褒美」としての意味合いが強いのに対し、スウェーデンではシナモンロールが日常生活の一部として自然に取り入れられている。家族や友人と一緒に食べる機会が多く、食べ物を通じた交流が重視されている点も、日本との違いの一つである。

このように、ミートボールとシナモンロールは、スウェーデンの食文化を象徴する存在であり、日本の食文化と比べることで、味付けや食べ方、食に対する考え方の違いが明らかになる。これらの料理や菓子は、スウェーデンの人々の生活様式や価値観を反映しているといえる。

ティレソ・コミューン(Tyresö kommun)

岡崎 匡輝 窪山 堅斗

1. 概要

Tyresö kommun(日本語読みで、ティレソ・コミューン)は直訳すると、「ティレソ自治体」という意味であり、スウェーデンの首都である Stockholms län(ストックホルム県)内にある、ティレソ市の自治体である。スウェーデンにおける地方自治は、日本でいうところの県に当たる、広域自治体の Landsting(ランスティング)と、日本での市町村に当たる、基礎自治体、Kommun(コミューン)の二層体制で成り立っており、ランスティングが広域医療や地域開発の一部を担当業務とし、コミューンが福祉や養育、地域のごみ処理などを業務としている。コミューンに似た存在として、日本にも地方自治体が存在するが、コミューンもランスティングも地方自治法などに基づき、国からの指揮監督が少なく、主に住民税を財源として地方それぞれが独自の裁量で運営されているという点において、コミューンは日本の地方自治体とは一線を画す存在である。今回、私達は人口約 4 万人のバルト海沿岸にあるティレソ市の市役所を訪問し、そこで行われている政策について施設役員の方々から話を伺った。

2. Kommun の福祉政策

まず我々がティレソ・コミューンを訪れて驚いたことは、コミューンがショッピングモール内にあったということである。日本語では「ティレソ自治体」ということもあったか、我々は日本の市役所や公民館のような施設に案内されると思っていたため、ガイドのエミルさんがショッピングモールの中を指差してこの先に市役所があると言った時には、建物を間違えたのではないかと思ってしまった。市民が気軽に相談しに来れるように、コミューンをショッピングモールの中に造ったとのことで、市役所・役場が専用の敷地を持ち、あらゆる他の施設から切り離された場所にあることが多い日本では、このような市役所の体制はあまり馴染みがなく、この経験は私達に独自の裁量で地方の運営を行うスウェーデンのコミューンの特異性を印象付けることとなった。その後施設役員の方々から、コミューンで行われている取り組みを伺ったが、これは前述した通り福祉関係の取り組みが殆どであり、日本が行なっている取り組みに似ているものも多く見られた。しかし、高齢者・障がい者への福祉政策について伺った時、日本人から見るとかなり異質な法律が存在した。それは LSS 法(Lagen om stöd och service för vissafunktionshindrade 『特定の障がい者に対する援助及びサービ

スに関する法律』)と呼ばれる 1994 年に導入された、対象者への権利を明文化した法律である。LSS 法の中には相談サービスやパーソナルアシスタンスが組み込まれ、これにより様々な障害を持つ人々は、受けられる支援のあり方や生活環境を自分自身で決定することができるようになった。障害を持つ人々の中には、認知機能に障害がある人も含まれており、後見人の制度がある日本の法律から見ても、「障がい者自身に自己決定させる」という要素はかなり異質なもののよう思えた。また、この法律により大規模な障がい者を収容する施設は大幅に減り、障がい者の人々は小規模なグループホームや、特別なサービスが受けられるアパートなどの生活環境を自分で決定することができ、他の人々と同じように暮らすことができるようになったとのことであった。

3. 考察

今回、ティレソ・コミュニティを訪問して、スウェーデンの Kommun のあり方や、そこで行われている福祉政策について詳しく話を伺い、私達が思ったことは、スウェーデンにおける福祉政策や地方自治のあり方は「個人主義」という考え方と深く結びついているということである。これはティレソ・コミュニティだけでなく、スウェーデンという国において多く見られる考え方であり、老若男女問わずそこに住むすべての人間が自分の人生のあり方を自分で決定する自由がある、あるいは自分で決定せねばならないという思考であり、たとえ如何なる障がいを抱えていようと、人として持たねばならない義務のように機能していると言っても過言ではない。長年、世界有数の福祉国家として日本のニュースで取り上げられてきたスウェーデンであるが、その内容の多くは「医療費の安さ」や「幸福度ランキングの高さ」(尤もこの『幸福度ランキング』自体、欧米の価値基準をもとに指標が作られており、そこには日本や中国、韓国といったアジア地域の人々の幸福の基準に当てはまらない要素も多く見られるため、この幸福度ランキングを鵜呑みにしてスウェーデンという国をこの世の理想郷のように語る人々には心底辟易させられるのだが)であり、我々が感じた個人主義という要素は全く語られていないように思える。また、個人主義と言っても、そこには最低限の線引きがあり、一線を越えれば罰せられるのは日本もスウェーデンも同じであり、その中で自分で何もかもを決定しなくてはならないということは、自己決定したすべての選択に絶対的な責任を負わねばならないという点において、フランスの哲学者サルトルの言葉を借りれば、「自由の刑に処されている」とも言えるのである。勿論、日本における障がい者の人々長期入院、退院後の受け皿の不足、得られる選択肢の少なさなどから発生する、「障がい者の人々が自己決定をすることができなくなっている現状」という問題は一刻も早く解決せねばならない日本の社会問題であることには間違いないが、スウェーデンの LSS 法をそっくりそのまま真似をして、障がい者自身に全てを決めさせる法律を、スウェーデンと比較して個人主義色の薄い印象のある日本の土壌で施行することが、果たして本当にウェ

ルビーイングにつながるのか、という点には一考の余地があるように思える。日本におけるウェルビーイング社会の実現に個人主義という要素は一体どれほど必要なのか、あるいは個人主義とは別の主義や考え方が必要なのか、という今回の訪問で生まれた新たな疑問は、「福祉国家スウェーデン」から我々に出された宿題のように感じられるのだ。

Njupkars Förskola

ニュプシエルス・プレスクール

渋谷明日香 川崎舞花

1. プレスクールとは

プレスクールとは、未就学児を対象に保育や教育を提供する施設のことである。スウェーデンでは、約 90% の子どもが 1 歳からプレスクールに通い始める。その対象となるのは全ての子どもだが、スウェーデンでは、障害をもつ子どもや移民の子どもなど、社会から距離を置かれ支援を必要としている子どもの存在を重要視している。

プレスクールと小学校の違いは目標の有無である。小学校には目標が設けられているが、プレスクールでは、目標よりも成長に価値が置かれている。例えば小学校では、「2 年生のうちに九九を覚える」というような到達目標が暗黙の了解となっているが、プレスクールでは目標を達成できなくても不利益を被ることはない。着眼点は「個人がいかに成長したか」というところにあるのだ。

2. 概要

Njupkars Förskola(ニュプシエルス・プレスクール)は、ティレソー市のグローンエンクス・スティーゲンと呼ばれる通りに位置する。

クラスは年齢によって分けられており、1～3 歳と 4～6 歳で編成されている。1～3 歳のクラスは 1 クラス 15 名、4～6 歳のクラスは 1 クラス 21 名に対して先生は 3 名配置されており、低年齢に手厚いサポートが提供されていると考えられる。両者共に 37 クラスあり、37 つのクラスが 1 つのチームとなって、支援計画や目標、各月のテーマなどの決定を行っている。

プレスクールは、先生とアシスタントの協働によって運営されている。先生として働くことができるのは大学で 3 年半の学びを得た者だが、一方でアシスタントに求められているのは、高校における 3 年間の学びである。アシスタントはミーティングを主催したり、他のスクールとの関係を維持したりすることによってスクールに貢献している。

3. 教育方針

子どもを「一番若い市民」として捉え、一人一人が自立した生活を行えるように教育を行っている点が大きな教育方針として挙げられる。例えば、一日のスケジュールをその日

の初めに子どもたちが確認・理解することで、子どもたちがより安定した自立的な生活を送ることができるように促していた。アクティビティを行う際も時間の概念を子どもたちが理解することに重点を置き、時計型のタイマーを用いて時間の理解を進めていた。子どもたちの自主性を尊重するためにプレスクール、子ども、そしてその親との信頼関係構築に力を入れているようだった。プレスクール入学後の3～4日間は親も一緒に子どもたちと行動を共にする。親と先生との一対一の面談が設けられており、何か子どもに関して不安や問題があった際にはフォローアップ面談を行われている。それだけでなく、先生と親はアプリ上で連絡を取ることで子どもの強みが親に伝達され、親とプレスクールの直接的な信頼構築も行われている。

さらに多様性の尊重も教育の中に組み込まれていた。教室には言語学習やサインを覚えるための様々な写真や絵が掲示されていた。これは障害のあるなしに関わらず学びに有効的であるとされている。絵本を読むこと一つとってもただ絵本を読み聞かせるだけでなく、演劇のように動きを付けるなど工夫がなされている。このような取り組みを行うためにプレスクールの先生は言語療法士や臨床心理士に指導を受けることがある。イベントも多様性について学ぶ重要な機会となっており、3月21日の世界ダウン症の日には「ロッカ・ソッコルナ(ロック靴下デー)」というイベントが行われる。左右色柄の違う靴下を履いてくるというイベントで多様性を意識するきっかけを作っている。

このようにプレスクールでは子どもたちが自分自身と他者が尊重される、することができるような教育方針となっている。

4. 課題

現在、プレスクールが抱える課題としてあげられるのは移民の家庭の子どもに関してだそう。移民家庭の子どもの一部にはスウェーデン語やスウェーデンの習慣など、家庭の文化とは異なる文化の社会で育っていかなければならない。しかしながら、プレスクールは義務教育ではないため、移民家庭の子どもなど言語や習慣を学ぶ必要のある子どもすべてにプレスクールでの教育が十分に行き届かない現状がある。最近では義務教育に加えて療育と似た支援で子どもの学びを補完する動きもあるそう。

5. 考察

今回、プレスクールに実際に訪問して気づいたのはすべての取り組みが子どもたちの成長のために設計されていると感じた。先生やアシスタントによって構成されているネットワークもただ大人が問題を防止するのではなく、プレスクールに通う子どもたちにより積極的に質の高い学びを提供するためのものだ実感した。日本では誤飲防止のために口に入れることのできるおもちゃはなるべくおかないように工夫がされているのに対して、今回のプレスクールの教室には木の枝葉や石などが多くあり、子どもたちが自然と触れ合い興味が持てるような空間になっていた。

さまざまなルーツ・特性を持った子どもたちがプレスクールに通っているのを目の当たりにして、包摂的な教育が徹底されていることが特に印象に残っている。違いがあることを教えるのではなく、違いがあることを前提に一人一人が自分や他者の強みを理解することの重要性を先生やアシスタントも含めて学んでいることが日本と大きく異なる点であると感じた。



カロリンスカ大学病院小児病棟

(Astrid Lindgrens Children's Hospital)

中野杏那 須藤茜

1. 概要

カロリンスカ大学病院は、スウェーデンの首都ストックホルムに位置する、ヨーロッパを代表する大学病院の一つである。本病院は、ストックホルム近郊のソルナ（Solna）とフーディング（Huddinge）の二つの主要キャンパスを拠点として運営されている。カロリンスカ大学病院は、世界的に著名な医学研究機関であるカロリンスカ研究所の密接に連携している点が大きな特徴である。基礎医学研究から臨床応用までを結びつけるトランスレーショナル・リサーチが積極的に行われており、研究成果が実際の医療現場に反映されやすい体制が整えられている。このような医療・研究・教育がこの病院の国際的評価の高さにつながっている。このようにカロリンスカ大学病院は、高度専門医療の提供に加え、医学研究および医療教育を担う国際的な大学病院として重要な役割を果たしている。

2. 実際に見学してみたの学びや感想

実際に病棟を見学してみて、子どもたちが安心して治療が受けられるように人形を模型にして治療方法を分かりやすくしたりと様々な工夫が行われていることに驚いた。日本ではここまでの細かい工夫は行われていないと思うので、これは日本でも取り入れていくべきものだと感じた。また、この病棟はとても居心地がよく、明るい雰囲気であったことが印象的だった。入院している子どもたちが不安を感じないように心がけているのだと感銘を受けた。

3. 考察

カロリンスカ大学病院の小児病棟を見学し、子どもを第一に考えた作りをしていたことが印象的だった。病院でやることは、注射やMRI検査など怖いことが沢山ある。しかし、ここでは、そのものの実際に音になる模型で慣れさせたり、見させることで子どもたちの不安を軽減する工夫などが見られた。日本ではただそのものの説明だけで終わるところが多いが、実際に似たものを見せることで、より、子どもたちの不安の軽減に繋がるなと思った。これは一例だが、他にもたくさんの子どものことを考えられたものや造りがあった。子どもを中心に考えた医療とは、治療技術だけでなく、環境や関わり方を通して子どもの気持ちに寄り添うことであると学んだ。今後、医療や対人支援に関わる立場になった際には、カロリンスカ大学病院の小児病棟のように相手の立場に立って不安を和らげる支援を行っていきたいと考える。



ロイヤルシーポート地区

(Stockholm Royal Seaport)

夏涵沁 三浦凜香

1,概要

ストックホルム・ロイヤル・シーポートは、ストックホルム市議会が持続可能性の方針のもとに、環境に配慮した、人と自然が共に暮らせる地域を目指し、2011 年から旧工業地帯を再開発しているプロファイルエリアである。プランでは、12,000 戸の集合住宅と、幼稚園、学校、スポーツ施設などの建設が進められており、約 35,000 の雇用創出が計画されている。また、国連の Agenda 2030 やストックホルム市の Vision 2040 といった長期方針に基づき、エネルギー使用量を年間 50 kWh/m² に抑制することや、化石燃料を使用しない交通システムの実現などを目標としている。

2,視察で印象に残ったもの

今回の訪問では担当の方から話を伺い、その後実際に町を案内していただいた。その中で印象に残ったことは住民と環境にやさしい街づくりをしているという点である。

(1) 人にやさしい街づくり

ロイヤルシーポートでは、街づくりにおいて住民参画を重要視し、住民の声が大切にされている。例えば定期的に住民から意見をもらうことができる場や、住民に対して情報発信をする場が設けられたりしている。また、スウェーデンでも高齢者にとって外出が困難であるという問題がある。その問題を解決するため、ロイヤルシーポート地区では駅や日用品のスーパーなどを歩いて五分以内の場所に設置しなくてはならないという。

(2) 環境にやさしい街づくり

環境への配慮としては再生可能エネルギーの利用や生ごみをバイオガスへリサイクルする仕組みなどがあげられる。さらに、夏に発電した電気を貯蓄し、冬に利用できるようにしている。他にもマイカーの利用を減らすための様々な取り組みがある。例えば駐車場は住宅 2 軒につき 1 台分しか設置できない。しかし、バスや船、自転車など様々な選択肢が用意され、街中には車や自転車を借りることができる場所を多く作るなどマイカーがなくても困らない仕組みができています。

3,街で印象に残ったもの

実際に街中を歩いてみて印象に残ったものは以下の二つだ。

一つ目はバキュームシステムが搭載されたゴミ箱だ。このゴミ箱はゴミ、プラスチック

ク、新聞などを分別して捨てられるようになっている。そして集積場まで地下のパイプでつながっており、自動的にごみが運ばれる。それによって衛生面やゴミ収集車を走らせる必要がないというメリットがある。

二つ目は庭の植物についてだ。ロイヤルシーポート地区では雨量の増加に伴う浸水被害を抑えたり、景観を良くしたりするために植物を増やそうという取り組みがある。そのためのルールとして、この木を植えたら何点、などと点数が決められており、マンションの庭は決められた点数が満たされるように作られている。

4,考察

ロイヤルシーポートを実際に視察してみて、その土地や住民を大切にする街づくりを自分の目で見ることができた。庭に木々を増やすことマイカーの利用を減らすなどの自然を大切にする姿勢を学ぶことができたり、5分圏内に必要な施設をそろえることや、バキュームシステムのついたゴミ箱など新たな発見が多くあったりと、とても面白く、また、学びを多く得ることができた。今回学んだことを生かしながら自分の住む場所においての環境や住民を大切にした街づくりとはどのような形なのか考えていきたい。

小学校訪問（Enbacksskolan）

荻野依那 奥原蒼葉

1. 概要

ティーレス市が運営する私たちが訪問した小学校には、0～9年生までの生徒が在籍している。また、同じ施設には、不登校やうつなどの課題を抱える生徒が通う特別支援学校が併設されている。さらに、法律に基づき、臨床心理士、カウンセラー、社会教師、校長、副校長などで構成される健康チームが設置されており、生徒の心身の健康を包括的に支援する体制が整えられている。

2. 視察での学び

【学校における臨床心理士について】

スウェーデンにおいて、臨床心理士(CP)になるために5年間の大学教育が必要であるが、学校で働くためのCPの資格は存在しない。学校におけるCPの主な役割としては、生徒が学校にいる間、学校生活を円滑に送れるようにケアをすることである。しかし、治療を学校で行うのではなく、福祉サービスを紹介するなどして、生徒と支援を繋げる架け橋のような役割を担っている。ティーレス市では、約1000人の生徒に対して1人のCPが配置されており、毎日学校に常駐しているスクールカウンセラーに比べ、CPは週1回のミーティング時や必要に応じて来校する体制となっている。特徴的な活動として、まず、生徒に対して行うIQの診断がある。IQが2%以下と低い生徒は特別支援学校のクラス(知的障害者用)に入る権利がある。それに加え、生まれからIQが低いのか、他の原因があるのか等も学校で診断する。次に、不登校の生徒への支援である。不登校であることに對して、生徒自身が責任を負うのではなく、学校が責任を取るべきであるという方針のもと、CPは少人数の教室に生徒と一緒に入ったり、迎えに行ったりするといった「寄り添う支援」を行っている。ティーレス市には、小学校の他に不登校の生徒のための学校や引きこもりの生徒のための学校も存在し、授業も教科ごとに分かれて受けることができる。

【学校におけるスクールカウンセラーについて】

スウェーデンの学校におけるスクールカウンセラー(SC)は、学校内の健康チームの一員として長期間学校に在籍し、生徒一人ひとりと継続的に関わっている。SCは、生徒の不安や精神的な問題が深刻化する前に対応する「予防的支援」を重視しており、早い段階で生徒の変化に気づき、長期的な視点で支援を行うよう努めている。しかし実際には、問題が顕在化してから対応が多くなっているのが現状である。

SCは、教師が主に授業や学習面から生徒を見ているのに対し、生徒の生活全体に目を向け、学校内だけでなく家庭での様子や日常生活も含めて総合的に支援を行っている。生徒本人だけでなく、教師や保護者からも直接連絡を取ることができ、アウトリーチによって

つながる場合もある。また、子どものことで不安を抱える保護者のカウンセリングを行うこともあり、家庭全体を支える役割も担っている。

相談の多くは中学生で、不安や抑うつ状態を抱える生徒が目立つ。近年では、若者の自殺や自傷行為の増加が深刻な課題となっており、特に女子生徒の自傷行為が増えている。背景として、富裕層の地域では成績や学校に対するプレッシャー、また SNS による他者との比較が大きなストレス要因となっていることが指摘されている。さらに、コロナ禍以降、精神的に不安定な若者や不登校の生徒が増加しており、10 年前と比べてもその傾向は顕著である。女子生徒においては精神的な問題の増加に加え、学業成績の低下も見られる。

SC は、欠席状況などの統計データを継続的に収集・分析し、それをもとに必要な支援や対応を検討している。また、欠席の原因調査も重要な業務の一つである。守秘義務は厳重に守られているが、必要な情報は健康チーム内で共有され、虐待が疑われる場合には速やかに自治体へ通報する体制が整えられている。一方で、生徒を安心させるため、カウンセリングの詳細な記録はあえて残さない場合もあり、この点にはメリットとデメリットの両面がある。

精神科などの医療機関が混雑しており、すぐに受診できない生徒も多いため、SC は専門医につながるまでの「つなぎ」の支援としても重要な役割を果たしている。SC になるために社会福祉士（SW）の資格は必須ではないが、事前に社会福祉に関する知識を持っていることが望ましいとされている。

【学校におけるセラピードッグについて】

スウェーデンでは近年、セラピードッグを導入する学校が増えている。これは政治的な決定により進められており、生徒がセラピードッグと触れ合うことで安心感を得たり、学習への集中力が高まったりする効果が期待されている。犬と一緒にゲームをすることで協力する姿勢を学ぶこともでき、脳内でドーパミンが分泌されるなど、心理的にも良い影響があるとされている。セラピードッグは生徒だけでなく犬にとっても良い効果があるとされ、学校によっては週に数時間の滞在から常駐まで、導入形態はさまざまである。今回訪問した学校では、週 2 回セラピードッグが学校に来ていた。

3. 考察

まず初めに、日本の小学校が 1～6 年生までで構成されているのに対し、スウェーデンでは 0～9 年生までの生徒が同じ校舎で学校生活を送っている。そのため、年齢の異なる子ども同士が日常的に関わる機会が多く、互いに良い刺激を受けながら成長できる環境が整っていると感じた。また、多様な専門職で構成される健康チームが学校に配置されている点も、子どもたちにとってとても良い仕組みであろう。学校という、子どもたちと日常的に接しやすい環境の中で、心身の健康を多角的に支援できる体制は、問題の早期発見や継続的な支援につながると考えられる。

日本の小学校にも CP の資格を持つ SC は配置されているが、多くは非常勤であり、生

徒と日常的に関わる機会は限られている。一方で、スウェーデンでは CP が学校内の健康チームの一員として関わっているため、生徒の心身の健康を日常的に支援できる点に感銘を受けた。

SC の体制について、日本では非常勤という不安定な雇用形態や、1 校あたりの勤務時間が週 4～8 時間程度に限られていることが多く、児童生徒や保護者が相談したいタイミングで支援を受けられないという課題がある。一方、スウェーデンでは SC が長期間学校内に常駐し、定例の学級会議にも参加することで、生徒の変化を早期に把握し、継続的な支援につなげている。こうした体制は、予防的支援の視点からも有効であり、日本においても参考にしていく必要があると考える。

また、日本にも SC は配置されているが、一般の学校にセラピードッグが常設・定期的に導入されている例はほとんど聞かれない。そのため、スウェーデン全体でセラピードッグの導入が進められている点は非常に印象的であった。実際にセラピードッグと対面した際、その場の緊張感が和らいだように感じられたことから、子どもたちにとっても、セラピードッグとの交流が安心感や心理的安定につながっているのではないかと考えられる。

ストックホルムに見るエコツーリズムと持続可能な都市・ 観光の在り方

五十島 佳穂 檀上 蒼

1. はじめに

近年、観光による環境負荷や地域社会への影響が問題視される中、自然環境の保全と地域経済の発展を両立させる「エコツーリズム」が注目されている。

ストックホルムは、都市計画と観光政策の双方において持続可能性を重視し、エコツーリズムを実践している世界的な先進例である。それを踏まえ、ストックホルムにおけるエコツーリズムの組織体制、戦略、都市・自然環境との関係、そして現地視察を通じて感じた点を振り返り、その意義について考察する。

2. エコツーリズム組織の役割と運営体制

ストックホルムのエコツーリズムは、自然や環境に配慮した旅行を推進し、持続可能な観光を実現することを目的としている。

主な活動内容は、エコツーリズムや自然体験のプロモーション、観光の質を高めるためのプランニング、ツーリズムに関する調査の実施などである。

組織形態はNPOに近く、約400の会員企業からの会費を主な財源として運営されている。また、ストックホルム市やEUから補助金を受けるなど、行政との連携が大きな特徴である。さらに、旅行会社や職業学校と協力し、オンライン・オフライン双方で研修を行うことで、観光に携わる人材の知識向上やサービス品質の底上げを図っている。

3. 2018年エコツーリズム戦略と重視される視点

スウェーデンでは、持続可能な観光の仕組みが整えられており、2018年にはエコツーリズム戦略が策定された。現在は、その成果が徐々に現れ始めている段階である。

この戦略では、以下の三点が特に重視されている。

第一に、美しい自然環境を守ること。

第二に、観光客と地域社会が良好な関係を築くこと。

第三に、価格ではなく「サービスの価値」を重視することである。

観光サービスには高い品質が求められ、そのために環境に配慮した道具の使用や、スタッフの専門的な学習が不可欠とされている。また、国際的にはグローバル・ツーリズム認証

も活用され、質の担保が図られている。

4. 自然資源を活かした観光と都市計画

ストックホルムは14の市から構成され、海と湖がつながる独特の水辺環境を有している。周辺には約3万の島があり、そのうち15の島が市内に位置している。大規模な島嶼プロジェクトには8つの市町村が参加し、地域全体で自然を活かした観光づくりが進められている。

都市計画においても、歴史的建造物を保存・再利用し、緑地や歩行者空間を重視した「人中心の街」が形成されている。こうした都市空間そのものが、観光資源としての価値を高めている。

5. 観光客の動向と国際連携

ストックホルムを訪れる外国人観光客は全体の約15%であり、ドイツやアメリカからの来訪者が多い。一方で、アジアからの観光客は比較的少なく、島嶼部へのアクセスの難しさが要因の一つとされている。

そのため、日本の旅行会社などと連携し、珍しい自然体験に関心を持つ層を対象としたツアーが企画されている。現在では、自然体験を中心とした3日間のパッケージツアーなどが商品化され、観光客の増加に一定の成果を上げている。

6. トレイル整備と地域経済への波及効果

約70の島でトレイル整備が行われ、2年間で道や橋、シェルター、ベンチなどが整備された。設置された100以上のベンチの一部には追悼の意味が込められており、あえて正確な位置は公開されていない。

公式オンラインプラットフォームでは、地図やコース情報、食事場所の有無などを確認でき、観光客だけでなく地域住民にとっても新たな自然の発見につながっている。

観光収入は7週間の繁忙期で年間利益の約半分を生み出しているが、春や秋にも来訪者を増やすことで、年間を通じた持続可能な地域経済の形成が図られている。

7. 自然保護とエコシステムへの配慮

スウェーデンでは自然保護に関する法律が古くから整備されており、大型ホテルの建設や無秩序な開発は厳しく制限されている。トレイルでは、倒木による事故を防ぐ管理や、生態系維持のための森林整備が行われている。

また、バルト海では魚類の生態系の崩れが課題となっており、幼魚が成長できる環境づくりを通して水質改善が進められている。これらの取り組みは、観光客に対してエコシステムの重要性を伝える学習機会にもなっている。

8. 土地利用の考え方と市民意識

スウェーデンやフィンランド、ノルウェーには「自然享受権」という考え方があり、商業的な自然利用は制限される一方で、私的な自然利用は認められている。土地所有者は市町村と契約を結び、観光との共存を図っている。

多くの観光客はこうしたルールを理解し、実際にトレイルではポイ捨てがほとんど見られなかったようだ。このことから、市民や観光客の高い環境意識が、エコツーリズムを支える重要な要素であることが分かる。

9. 現地視察を通して感じたエコツーリズム

自由視察の日に街を歩いた際、公共交通機関が非常に整っており、バスを利用することで多くの観光地に容易にアクセスできると感じた。交通量は少なく、車よりも公共交通が主流である点は、環境負荷の低い観光を支えている。

また、街ごとに異なる景観が保たれており、日本の繁華街のように画一化していない点が印象的であった。土産物店では包装が少なく、過剰包装を抑える姿勢が見られた。

スウェーデンのハンバーガー店「マックス」では、プラスチック使用を極力避け、紙ストローやフタも使わず直接カップから飲む形式が採用されていた。ゴミの分別は7種類以上に分かれていたが、実際の分別行動には改善の余地も感じられた。

さらに、セルフサービスが進んでいることで、利用者が自分に合った量を選べ、食べ残しやフードロスの削減につながっている点もエコツーリズムの一環であると考えられる。

10. エコツーリズムの意義とまとめ

スウェーデンの自然環境は、マインドフルネスやメンタルヘルス、身体的健康にも良い影響を与えるとされている。エコツーリズムは、自然を守りながら経済的価値を生み出し、地域社会・観光客・環境の三者が共に利益を得る仕組みである。

ストックホルムの事例から、エコツーリズムは単なる観光手法ではなく、都市計画や社会の在り方そのものと深く結びついていることが分かった。このような取り組みは、日本における持続可能な観光政策を考える上でも、大いに参考になると考えられる。

参考文献

環境省 エコツーリズム エコツーリズムの全体像

取得日 2025 年 12 月 16 日

<https://www.env.go.jp/nature/ecotourism/try-ecotourism/env/5policy/pdf/2-1.pdf>

知的障害者のための高等学校訪問

(Arlanda gymnasiet)

中川莉那 安原奏美

1. 概要

この高校は、障害を持った子供たちへの就職や社会参加に向けたプログラムが整備されている。軽度から中度の障害を持つ生徒を対象に、職業体験や実生活に直結した学びを提供しており、生徒の社会参加や自立を支援している。中学校を卒業できなかった生徒に対しても準備プログラムを用意し、すべての生徒に対して柔軟な対応がされている。学校運営は、教員やアシスタント、健康チームが連携し、学習や心身の健康、社会適応を多面的に支援する体制が整っている。

2. 特徴

レストラン業務や自動車関連業務、販売職など、社会参加を見据えた実践的な職業プログラムが充実している。生徒は実際の仕事を通して働く力や責任感を身につけ、卒業後に就労するだけでなく、会社を設立するなど経済的自立を果たす例もある。また、プログラムで得た収入を遊園地への外出やレクリエーションに活用することで、学習成果を日常生活に結びつけ、働くことの意義や達成感を実感できる工夫がなされている。さらに、教員と30人のアシスタントによる手厚い支援体制に加え、カウンセラー、生徒コーチ、スクールナース、職業アドバイザーが配置され、保護者や関係機関とも連携しながら、生徒一人ひとりを多角的かつ継続的に支援している。

3. 考察

学習と職業体験、社会参加を一体化させた教育が行われており、生徒一人ひとりの成長と自立を包括的に支援する体制が整っていた。職業プログラムによる実践的学びと、個別支援の組み合わせにより、社会参加や経済的自立に向けた力を着実に育むことが可能であると感じた。(安原) この高校では、単にスキルを習得させるだけでなく、働いて得た収入を余暇に使うことで「働く喜び」を実感させるプロセスがプログラムの中に組み込まれていた。労働を義務としてではなく、生活を豊かにする手段として捉えさせるこの工夫は、生徒の社会参加への意欲を高める大きな要因になると考えた。(中川)

若い心理療法士の働くクリニック

斎藤愛莉 一本鎗優来

1. 概要

BUP は、発達障害や重度の精神疾患をもつ青少年を対象とした精神医療サービスを提供している施設である。主に集中的なオープン外来を行っており、一般的な外来では対応が難しい患者が通院している。また、発達障害に関する診断や研究も行っており、外来だけでなく別の場所にある入院ユニットとも連携して支援を行っている。

BUP では、FACT (Flexible Assertive Community Treatment) という方法を用いてサービスを提供している。FACT はオランダで開発された支援モデルであり、現在はオランダやノルウェー、南スウェーデンなどで実施されている。以前のように診断ごとに治療を決めるのではなく、患者一人ひとりに焦点を当てた支援が行われている点が特徴である。

2. 実際に行ってみて分かった実態

FACT モデルでは、ケアマネジメントの考え方をもとに、それぞれの患者に合わせた集中的な支援が行われていた。チームは精神科医、臨床心理士、正看護師、ソーシャルワーカー、作業療法士などの多職種で構成されており、柔軟に役割分担をしながら支援を行っている。対象となる患者は、重度の精神疾患をもつ青少年であり、複数の問題を同時に抱えているケースが多いと説明された。例えば、学校に行けない、睡眠や食事に問題がある、家族関係に困難があるなど、生活全体に影響が出ている場合が多い。患者の状態に応じて支援の強度は変化し、状態が悪い場合には週に数回面接を行ったり、患者のいる場所までスタッフが訪問したりすることもあるそうだ。また、入院病棟とも強く連携しており、入院が必要な場合や退院後の支援についても一緒に計画を立てている。

3. 感想・考察

今回の見学を通して、青少年の精神医療では、本人だけでなく家族や生活環境を含めた支援がとても重要だと感じた。FACT モデルのように、患者の状態に合わせて支援の頻度や内容を変えられる方法は、実際の生活に即した支援であると思った。特に印象に残ったのは、ソーシャルワーカーの役割である。一般的な外来とは異なり、家庭訪問を行うことで、家族の状況を含めて支援ができる点が特徴的だと感じた。問題が家族にあるのか、子ども本人にあるのかを見極めたうえで支援方針を決めているという説明が印象的だった。日本では、外来治療は病院内で完結することが多く、家庭訪問や家族全体への支援はあまり行われていないところが多い。そのため、BUP のように、重度のケースに対して集中的に関わる体制は、日本でも参考になると感じた。今回の見学で得た学びを、今後の学習に活かしていきたい。

ストックホルム大学生との交流

若狭柊弥 福岡友陽

1. スtockホルム大学のキャンパスツアー

交流の前に、ストックホルム大学の大学生がキャンパスツアーをしてくれました。1対1のペアにそれぞれ分かれ、日本語や英語を交えながらキャンパスについての説明や雑談を楽しみました。初めは緊張してコミュニケーションを取るのが難しかったですが、交流が終わる頃にはすっかり打ち解け、会話が絶えなかったです。

2. 学生交流

ストックホルム大学から移動し、エミルさんのオフィスをお借りして交流会とピザパーティを行いました。交流会では、事前に準備していた法政大学の紹介プレゼンテーションを行い、ストックホルム大学の学生に本学について知ってもらうことができました。スウェーデンの大学との違いに興味を持ってくれたり、「エコピョンがかわいい!」といった嬉しい感想も聞くことができました。プレゼンテーションの後は、けん玉、折り紙、箸掴み遊びのブースに分かれて、日本文化を体験してもらいました。特に、ストックホルム大学の学生が箸の使い方をとても上手にこなしていて驚きました。その後はピザパーティを楽しみながら、文化の違い、日本のサブカルチャー、音楽などについて英語で交流しました。和やかな雰囲気の中で、互いの文化を深く知る貴重な時間となりました。



スウェーデンの地域開発について

中野杏那 安原奏美

渋谷明日香 五十島佳穂

私たち地域開発班はスウェーデンの地域開発の中でも「ストリートムーブス」「木造都市計画」「エコライフモデル地区」に焦点を当てて事前学習を行った。それぞれの取り組みから見えてくるスウェーデンの特徴や地域づくりの考え方について紹介する。

1. ストリートムーブスについて

スウェーデンでは、「1分都市」という人中心の都市モデルを提示している。これは、自分の住まいから徒歩1分圏内に魅力的で安全な公共空間を整備し、人々がより快適に暮らせる都市を実現しようとする考え方である。特にストックホルム市内で開催されているプロジェクト「ストリートムーブス」は、2030年までに全国の道路を持続可能で活気ある空間に転換することを目標としている。この取り組みの基本理念は、「誰もが自宅から1分以内で魅力的な公共空間にアクセスできる都市を作ることである。具体的には既存の車道や駐車スペースの一部を再利用し、木製モジュールを設置してミニ公園や休憩所へと転換する方法が用いられている。これらのモジュールは組み換えが可能であり、地域の特性に応じて柔軟にカスタマイズできる点に特徴がある。

さらにこのプロジェクトは地域住民の参加を重視して進められている。住民ワークショップを通じて「自宅周辺の道路をどのようにデザインしたいか」を話し合い、子ども、高齢者、移民など多様な人々にとって使いやすい空間となるに工夫されている。また、学校やデザインスタジオとも協力し、若者の視点を取り入れる試みも行われている。2020年秋にはストックホルム市内の道路に実験的にストリートムーブスのモジュールが導入され、キックボード置き場やテーブル、ベンチなどが設置された。これにより、多くの人々が集まる賑わいの場が生まれ、利用者からも好意的な反応が得られた。環境面での効果も大きく、車の利用を減らし自転車や徒歩を推進することで、CO2の排出量の削減や街の持続可能性の向上が期待されている。「1分都市」は、都市デザインの改善にとどまらず、地域住民同士のつながりを強める取り組みでもある。

このような柔軟で住民参加型の都市づくりは、世界各地の都市政策にも影響を与えており、スウェーデンの先進的な都市戦略として国際的に注目されている。

2. 木造都市計画について

2025年から、「ストックホルム・ウッド・シティ」と呼ばれる世界最大規模の木造都市

建設プロジェクトが始まる予定であり、最初の建物は 2027 年に完成する予定だ。建設地はストックホルム南部に位置し、もとは興行施設の集まる地域であったが、過去 20 年の間に徐々に都市機能を備えたエリアへと発展してきた。この木造都市計画は、単なる都市開発ではなく、社会的・環境的課題に対応することを目的としている。第一にストックホルム南部で不足している雇用機会の改善が挙げられる。また、職場と住居を近接させる「職住近接」の都市構造を実現することで、通勤時間の短縮や生活の質向上に寄与することが期待されている。

3. エコライフモデル地区グリーンハウスについて

スウェーデン南部の都市マルメに位置する「グリーンハウス」は持続可能な暮らしを具体的に実現するために設計されたエコライフモデル地区である。環境に優しい設備と、住民同士の交流を促す空間設計が特徴であり現代都市における持続可能な住環境の理想形の一つと評価されている。グリーンハウスでは、環境負荷を低減する設備を整備するだけでなく、住民がそれらを積極的に利用することで自然とコミュニティが形成されている。屋上庭園などを通じて、誰でも自由に野菜や植物を育てることができ、家庭栽培を楽しめるだけでなく、自然を介した交流の機会も広がっている。

このようにグリーンハウスは、単なるエコ住宅ではなく、社会的つながりを重視した住まいづくりを実現している。結果として多様な人々が交流し、支えあう持続可能なコミュニティが育まれており都市生活のなかで「人と人との関係性」「環境への配慮」「コスト削減」を同時に達成する先進的なモデルとなっている。他都市にとっても参考となる取り組みである。

4. まとめ

以上のことから、スウェーデンの地域開発は、単に建物や施設を整備するだけでなく、環境への配慮と人と人とのつながりを重視した取り組みであることが分かった。徒歩圏内で生活が完結する「1分都市」の理念や共有スペースを通じた自然な交流を生む仕組みなど、人間らしい豊かさと持続可能性を両立させる地域づくりが進められていると言える。これらの事例は、今後の都市政策において持続可能で温かみのあるまちづくりを考える上で、重要な示唆を与えるものである。

参考文献

- ・ストックホルム森の街：スウェーデンが世界最大の木造都市を建設
- ・日本国際社会学会（2022）「スウェーデンのストリートムーブメント～ストリートムーブスがもたらす都市の変化～」

スウェーデンの福祉政策

岡崎 匡輝 中川 莉那

奥原 蒼葉 平野 佐奈

私たちのグループはスウェーデンの福祉政策、とりわけ医療制度・求職者(失業者)支援・児童支援の3つについての調査を行った。スウェーデンは世界有数の福祉大国であり、その特異な政策・社会制度からは、日本の現行の社会制度をより良いものにできるヒントを得ることができると私達グループは考え、スウェーデンの福祉政策についての調査を行ったのである。

1. スウェーデンの医療制度について

まずスウェーデンの医療制度における特徴を語る前に、スウェーデンの医療制度について解説したい。スウェーデンの医療制度はその大部分が国民の税金で賄われており、医療費の約7割は地方税から賄われる。医療サービスは「Landsting」、日本で言うところの地方自治体により提供され、住民登録を行ったスウェーデンの国民は、原則的に各地域における「Vårdcentral」という医療センターからホームドクターが選ばれた後、医療支援を受けられ、その際に自己負担額が軽減されることとなる。更に、スウェーデンでは18歳未満の医療費が救急車やヘリコプターでの緊急搬送の費用や診察キャンセル料を除けば原則無料であり、これには処方箋や入院といった医療支援も含まれる。日本においても医療行為を無料、または自己負担額を大幅に軽減し、受けることが出来る政策はあるものの、それは生活保護における「医療扶助」などのケースや、各地方自治体の実施している、医療費助成制度によるものであり、全額免除の資格を得るためにはいくつかの審査を行わなければならなかったり、都道府県別にその制度の内容や補償額にばらつきがあるため、子供に対する医療費の全額免除という政策は我が国の政策と比較しても特異な政策であると言えることが出来る。無論、スウェーデンにおいても20歳を超え、成人になった場合、診察料が有料になるが年間の治療費が900Kr(日本円にして約13000円)を超過すると、それ以上は免除されるという政策が現行のスウェーデンの医療福祉政策である。一方、日本においても「高額療養費制度」という、スウェーデンの政策に似た制度が存在するが、年齢や所得により自己負担額が変化し、一番安いケースでは8000円に抑えられる。しかしこれは、70歳以上の住民税非課税世帯I(年金収入80

万円以下等、対象家族全員の所得が 0 円の場合)に該当する者が外来にのみかかる場合に限定された額であり、入院する必要がある場合、その負担額は 15000 円にまで引き上げられてしまう。その他の世代、収入における負担額が平均して約 80000 円という所からも、スウェーデンにおける医療費の自己負担額の低さが見て取れる。

2. スウェーデンの求職者支援について

スウェーデンでは求職者・失業者らは共に、「Arbetsförmedlingen」という、日本でのハローワークに当たる機関において、職についての相談を受ける。求職支援の主な内容は、面談やカウンセリングといった就職サポートをはじめ、種々の職種に応じた必要スキルを獲得するための教育支援、企業とコンタクトをとり実務を学ばせる研修制度支援と多岐にわたる。更にスウェーデンは近年、自国への移民・難民支援にも力を入れており、スウェーデン語習得のための教育支援なども行われている。失業者における支援も求職者と同じく、教育・研修・支援であるものの、求職者と違って、失業者は失業年数に合わせて、基本保険と任意所得関連保険の 2 種類から給付金が発生する為、急なリストラに遭っても安心して求職活動が出来るのだ。

3. スウェーデンの児童支援について

最後にスウェーデンの児童支援についてだが、現行の日本の児童支援の現状についても理解しておきたい。日本で行われる児童支援の中でも比較的有名な支援が、子供のいる家庭に対して行われる「児童手当」だろう。日本では 2025 年現在、18 歳以下の子どもに対し月額 10,000~15,000 円(第三子以降は 30,000 円)が非課税対象で振り込まれるが、この制度にあやかるために、現住所の市区町村に「認定請求書」を提出する必要があるが、その記入方法や必要書類が複雑で分かりにくい場合がありこれによって受給資格のある者でも手続きをお諦めたり、遅延したりというケースが生じる。対して、スウェーデンにおける児童手当の対象は 16 歳と日本よりやや低く、子ども一人あたり月額約 7000 円であり、非課税対象で自動で支給される。これにより煩雑な書類の用意の必要がなくなるため、受給資格のある者に分かりやすい制度であることは間違い無いだろう。更に、スウェーデンでは公立大学・私立大学において、スウェーデンの学生に対しては学費を無償化する取り組みがなされており、間接的に若年層の教育の支援も行われているのである。

最後に、スウェーデンは世界幸福度ランキング 2022-2024 にて、世界で 4 番目に幸せな国となっており、これは今まで話してきた種々の充実した福祉政策が一因となっているという考えを述べて、私たちの事前学習における総括とさせてもらう。

【参考文献】

- ・ スウェーデンハンドセラピー協会, 「スウェーデンの医療制度について」,
(<https://swedenhandtherapy.com/swedish-healthcare-system> ,2025 年 12 月 7 日
取得)
- ・ 保健 ROOM 保健医療, 2020, 「高額医療費はいくらから申請できる？自己負担限
度額の計算方法を徹底解説」, (<https://hoken-room.jp/medical/9130> ,2025 年 12 月
7 日 取得)
- ・ 厚生労働省ホームページ, 2007, 世界の労働力 2007,
(<https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kaigai/08/dl/25.pdf> ,2025 年 7 月 1 日取得)
- ・

スウェーデンの障害者福祉

荻野依那 斎藤愛莉

壇上蒼 川崎舞花

1. バリアフリー

スウェーデンでは、障害者の移動制約を人権問題として捉え、ノーマライゼーションの理念に基づき、誰もが交通サービスへアクセスできる環境整備を進めてきた。地下鉄全駅へのエレベーター等の設置や、路線バスのローフロア化など、公共交通のバリアフリー化は国全体で徹底されている。また、公共交通機関を利用できない人に対しては STS（スペシャル・トランスポート・サービス）が提供され、自宅から目的地まで送迎するドア・ツー・ドア型や、病院等を巡回する公共施設巡回型など、個々の状況に応じた柔軟な移動支援が用意されている。住宅面では 1975 年から建築法にバリアフリー項目が盛り込まれ、移動能力が低い居住者にも安心して生活できる環境整備が義務化された。さらにスウェーデンには障害者手帳制度がなく、年齢や原因を問わず必要性が認められれば補助器具が無料で貸与され、不要になれば清掃・再利用される仕組みが確立している。これらの取り組みは、誰もが暮らしやすい社会を実現するための重要な基盤となっている。

2. 障害者雇用

サムハルは 1980 年に設立されたスウェーデン国営の企業であり、就業を通して障害者のスキルアップを図り、障害者が居住する地域で最も適した職種・業種の仕事へ就職を手助けすることを最終目標としている施設である。従業員は 2 万～2 万 3000 人程でその内の約 90% の人が障害を持っている。サムハルは、障害があることで一般の労働市場で就職することが難しい人に雇用の機会を提供して働くことを通じて成長を促すことを目的としている。サムハルは、公的機関等とも連携をとっており、そのひとつが「公共職業安定所」である。「公共職業安定所」では、サムハルで就業するための条件を満たしている労働者（候補者）を障害の程度が重い人を優先に選別し、サムハルへ紹介する役割を担っている。一方で選別の結果、サムハルでの就労が最善ではないと判断された場合には、サムハルでの就業ではなく、障害を持つ人の教育・訓練プログラムへの参加や補助金雇用による就業機会が提供される。

またサムハルの課題として、政府からの資金的援助をできるだけ減少させ収益性のあ

る企業としてなるべく自立するという収益性の高い目標と重い障害のある人から雇用の機会を提供するという福祉の目標とが矛盾した目標設定になっていると指摘されている点がある。ほかにも年間従業員の5%を民間雇用へ移行させる設定があるが、実績は3%前後にとどまっていることや、スウェーデン国家監査庁（Riksrevisionen）は2021年に報告書を出し、「サムハルが最も支援を必要とする人に十分な就労機会を提供していない」と厳しく指摘していることが挙げられる。

その他の傾向として、賃金補助などによって民間企業や小規模な社会的協同組合による雇用創出、個別支援、教育連携といった支援も主流になってきており、サムハルは重要な選択肢のうちのひとつとして残りつつ、サムハル依存からインクルーシブな通常就労へシフトしてきていると考える。

3. 特別支援教育

こうしたスウェーデンの特別支援学校が目指す理想の児童像は、「自分で意思疎通ができる子」である。障害スウェーデンにおいて特別支援学校の対象となるのは、聴覚障害者を除き、IQが70以下の知的障害児に限られている。授業としては主に、「教科コース」と「領域学習コース」の2つのコースがあり、児童の知的能力に合わせたインクルーシブ教育が展開されている。障害者であるために受動的になるのではなく、自らの意思を発信することが大切であると考えられており、そのために絵カードや写真などを用いた代替コミュニケーションの指導が行われている。

インクルーシブ教育が機能している背景にあるのは、LSS法である。これは、ノーマライゼーションの実現を目的として1994年に成立した法律であり、グループホームやデイアクティビティセンターなどを初めとする10種類の支援を提供している。インクルーシブ教育を支えているのは、その中の「パーソナル・アシスタンス」という制度である。これにより、生活に困難を伴う人々が「パーソナル・アシスタント」と呼ばれる専属のアシスタントと共に生活を送ることが可能となり、子どもたちは、授業、宿題、移動、食事などの様々な場面でサポートを得られるようになったのである。日本がインクルーシブ教育の実現に至らない背景には、こうした法律の欠如があるのかもしれない。

参考文献

- ・外山義「スウェーデンの住宅政策」
- ・和平好弘 平成9年9月「ヨーロッパにおける交通のバリアフリー ―STSを中心に―」
- ・日本義肢装具学会誌 Vol.17 No.1「スウェーデンにおける小児補助器具の紹介 ―補助器具に対する基本コンセプトと実際―」

・ [サムハル：スウェーデンにおける保護雇用の取り組み（スウェーデン：2011年4月）](#) | フォーカス | 労働政策研究・研修機構（JILPT）

・ 独立行政法人 労働政策研究・研修機構 2025年6月30日取得

https://www.jil.go.jp/foreign/labor_system/2011_4/sweden_01.html

・ [サムハル（Samhall）～スウェーデンの障害者雇用に対する考え方 - 成年者向けコラム](#) | 障害者ドットコム

・ 福地 潮人 平成21年6月8日 「障害者の就労支援に関するスウェーデンと日本の比較研究」

・ Swedish Quality Care 「スウェーデンの障がい者に対する最大の自由改革」

<https://www.swedishqualitycare.jp/blog/freedom-reform-for-people-with-disabilities-in-sweden> (2025年6月28日取得)

・ 時事ドットコム 「『学びと発達の権利』とは？福祉の国、スウェーデンの特別支援学校事情」 <https://www.jiji.com/sp/v4?id=202008stsg0001> (2025年6月28日取得)

スウェーデンの心理職について

須藤茜 田中天琉

若狭柊弥 三浦凜香

1. スウェーデンの心理職の種類、業務内容

スウェーデンでは青年・児童精神医学の分野において心理職の需要が高くなっている。実際にどのように支援をしているのか、日本にはない取り組みの一つとしてブリガンがあげられる。ブリガンとは直訳で橋を意味する言葉である。医学知識を持つ専門職のチームで、心理士や言語聴覚士、理学療法士などによって構成されている。目的は「義務教育のスタートラインをより良いものにするための準備」であり、義務教育に入る前の環境を整えるという一次予防を目的とする。そこからわかる通り支援対象は4~6歳の幼児である。活動の拠点を医療機関に置くのではなく、地域のコミュニティに置くことを目標としている。一体どのように連携を取っているのかというと、以下ようになる。小児保健センターや就学前学校に対しての助言をし、必要があれば病院などの医療機関に繋げる。小児保健センターというのは子どもの健康をサポートする施設であり、看護師さんに対して無料で育児の相談や予防接種などが受けられる施設である。もちろん子どもや保護者に対しての支援も行う。では実際にどのように支援を行っているのだろうか。ブリガンにアクセスをした親子に対して支援を行う。最初に就学前学校や小児保健センターや親から情報を集めてそれを整理する。その後、アセスメントを行い必要なら検査も実施する。その後就学前学校の教員などと情報を共有し、支援計画を提案していく。またブリガンは啓発活動も行っている。医療福祉、警察や政治家への研修会やワークショップ、また親に対しての学びの場も提供している。

2. 心理職につくまでの過程

スウェーデンでは、心理士に着くためには国家認定心理士という国家資格が必要である。国家認定心理士になるには、高校卒業後、大学で、5年の心理学プログラムを修了する必要がある。これは、学士課程と修士課程が一体になった専門職養成コースで、日本の大学よりも実践的な内容が多く含まれている。大学を卒業すると、次は「PTP」と呼ばれる1年間の実務研修に進む。これは、病院や学校、福祉施設などの現場で、フルタイムの心理士として働きながら実地経験を積む制度で、1年間で2000時間、有給で行われるのも特徴である。ちなみに日本での実習は、大学在学中に実習期間が450時間で、無給で行われている。このPTPを修了すると、スウェーデンの「社会庁」という機関に申請し、正式に国家認定心理士として登録されます。これによって初めて、「心理士」という名称を名乗って働くことができる。

3.スウェーデンの心理職の浸透度

スウェーデンでは「支援は当然のもの」という考えのもと、子どもの権利が社会全体で重視されている。また、地方自治体の権限が強く、地域に根ざした柔軟な支援体制が整えられている。日本と比べると、スウェーデンは就学前から支援が始まり、診断の有無に関わらず誰でも利用できる点が特徴である。支援は主に地域の保健センターで行われ、保護者は支援チームの一員として関わる。一方、日本では就学後に医療機関や学校を中心に、診断後の支援が多い。このように、スウェーデンの支援制度は早期支援と地域連携を重視している点が日本との大きな違いである。

4.最近の動向と課題

スウェーデンでは、高度に発達した福祉国家として心理支援体制が整備されている。しかし、心理職が抱える構造的な課題も顕在化している。第一に、人材不足の深刻化だ。特に公的医療機関や学校などの教育分野では心理士の配置が十分ではなく、一人ひとりの専門職にかかる負担が増大している。心理職は高い専門性が求められる一方で、他職種との連携が必須であるにもかかわらず、孤立した専門職として業務を抱え込みやすいという構造的問題も指摘されている。

第二に、デジタル化の進展に伴う職能の変化が挙げられる。スウェーデンはオンライン医療・心理支援の導入が世界的にも早く、近年はオンラインカウンセリングやデジタル介入が急速に普及している。その結果心理支援へのアクセスは拡大したものの、技術依存による質の担保や、個人情報の扱いをめぐる倫理的課題が浮き彫りとなっている。対面支援との使い分けの基準づくりやデジタルツールを用いる際の専門職としての新たな倫理規範の整備が求められている。

スウェーデンの育児・教育施策について

夏涵沁 一本鎗優来

福岡友陽 窪山堅斗

1. スウェーデンの教育カリキュラムとその価値観

スウェーデンの学校では、私立の学校も含め、すべての学校は教育庁が定めたカリキュラムに従う必要がある。国立教育庁（Skolverket）が発表している義務教育のカリキュラムでは、宗教教育が社会学習の中に含まれる点や、言語関連の教科が多い独自性が見られる。言語関連の教科に関して、スウェーデン語は第一言語として学ぶ子どもと、第二言語として学ぶ子どもに分けて指導され、現代語（ドイツ語、フランス語、スペイン語など）の科目が設けられている（Skolverket, 2024）。その他、短時間の母国語授業も設置されており、移民の子どもが母国語を学び続けられる仕組みが整っている。スウェーデンの教育方針は民主主義と人権尊重の価値観に基づき、その理念は義務教育のカリキュラムにも反映されており、プレスクールの段階からジェンダー教育に関する内容が組み込まれている。学校の教職員には、子どもたちに性別の固定観念が、人の可能性にどのような影響を与えるのかを理解させ、性別による制限を批判的に考える力を育てる義務が明記されていることが印象的であった。その他、自己表現力や問題解決力の育成、児童生徒一人一人の個性や強みを引き出すことや、他者とのコミュニケーションが重視されながら、お互いの違いを理解し、尊重することが重視されている。その背景には、性別、トランスジェンダー、民族、宗教、障害、性的指向、年齢などに対する差別を禁止し、平等な権利と機会を保障する包括的な差別禁止法(Diskrimineringslag) は 2008 年に発表されたことが挙げられる。教育機関においても、差別に対して調査、分析、改善、再評価の 4 つのステップで対策することや、差別防止に向ける教育を積極的に行い、その活動内容を文書として記録することが義務づけられている。

参考文献

Diskrimineringsombudsmannen 「Aktiva åtgärder för förskola och skola」

<https://www.do.se/for-arbetsgivare-och-utbildningsanordnare/aktiva-atgarder-for-forskola-och-skola>(2025.12.9 閲覧)

Skolverket (2024) 「Curriculum for Compulsory School, Preschool Class and School-Age Educare」

Skolverket 「Din rätt att läsa modersmål i grundskolan」

<https://utbildningsguiden.skolverket.se/grundskolan/sprak-i-grundskolan/din-ratt-att-lasa-modersmal-i-grundskolan#1> (2025.7.12 閲覧)

Riksdagen.se https://www.riksdagen.se/sv/dokument-och-lagar/dokument/svensk-forfattningssamling/skollag-2010800_sfs-2010-800/

2. スウェーデンの社会人教育制度

スウェーデンは、社会人が就労と学習を繰り返しながら能力を高めるリカレント教育の発祥地とされる。生涯教育が人生の豊かさを目的とするのに対し、リカレント教育は仕事に必要な技能を身につけ、実践に活かす点に特徴がある。かつて一般的であった「学ぶー働くー引退する」という固定的な生き方から、必要に応じて学び直しを組み込む柔軟なライフコースが求められるようになり、この変化を支える仕組みとしてリカレント教育が重視されてきた。

リカレント教育は原則として開かれた制度であり、公開講座や自治体の学習講座、オンライン教育、職業訓練などは学歴・年齢を問わず誰でも受講できる。ただし、高等教育の正規課程や国家資格取得講座などでは、学歴要件、科目履修、実務経験、入学試験などが課されることもある。また、教育訓練給付金の利用には雇用保険加入期間などの条件が必要である。したがって制度としての開放性を保ちつつも、学習内容に応じた要件が設定されている点が特徴である。

スウェーデンでリカレント教育が発展した背景には、第二次世界大戦後の貧困や労働力不足、中卒就職者の増加がある。国民の教育ニーズの高まりを受け、政府は「コンヴェックス」と呼ばれる社会人教育機関を整備し、基礎教育の保証、高等教育へのアクセス拡大、労働市場への有能な人材供給を目的として制度を発展させてきた。

スウェーデンのリカレント教育には四つの強みがある。第一に、受講期間中の生活費を国が支援するため、誰もが安心して学び直しに取り組める点である。第二に、多様なコースと柔軟な学習形態が整い、個々のニーズに応じた学習が可能である。第三に、学び直し文化の定着が高度人材の育成やイノベーションの創出につながり、国際競争力の向上に寄与している点である。日本が2020年の国際競争力ランキングで34位にとどまる一方、スウェーデンが6位と高評価を得ていることはその象徴である。第四に、移民・留学生に対しても開かれた制度であり、基礎教育やスウェーデン語教育を無償で提供することで、多文化社会の統合にも貢献している。

3. スウェーデンのベビーカー文化

日本でも子どもと移動する際にベビーカーを利用する人は少なくない。しかし国土交通

省の調査によると、「電車やバスなどでベビーカーを使用している人が、周囲の人や通行人と接触したり、妨げにならないよう気をつかっていると思うか」という問いに対し、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した人の割合は 86.2%であった。この結果から、日本ではベビーカー利用に対する理解が十分でなく、利用者自身が申し訳なさや“特別な配慮が必要な存在”という感覚を抱きやすい状況がうかがえる。

一方、スウェーデンでは公共施設において、利用者がベビーカーを「持ち込む・常時使う」ことが当然のものとして受け入れられている。子どもと移動する際に「ベビーカーがあるから」という理由で親の行動や可能性が制限されないよう、また子育てによる孤立を生まないう、社会全体で支える取り組みが根付いている。「親である前に一人の人間である」という考えを基盤に、個人として尊重される環境が整えられているのだ。

その具体例として、ベビーカー置き場の設置と公共交通機関での優先エリアが挙げられる。まずベビーカー置き場については、公共施設をはじめ多くの場所で専用スペースが設けられており、ベビーカー利用者の存在を前提とした取り組みといえる。これらはバリアフリー設計の一環として、エレベーターやスロープと併設されていることが多い。

次に公共交通機関では、バスや地下鉄にベビーカー・車いすの優先エリアが確保され、ベルトで固定できる設備が備えられている。通路も通行しやすいよう広めに設計されている。実際にスウェーデンのバスを利用した際、乗車時に車体が入口側へ大きく傾く仕組みがあり、これもベビーカー利用者への配慮の一つであるのではないかと感じた。

子育てや教育と聞くと子どもへの直接的支援が想起されがちである。しかし、まずは子育てを担う親を社会全体で支える環境を整えることが、結果として子どもへの支援にもつながるのかもしれない。

海外研修を終えて

三浦 凜香

1. 海外研修全体を通しての感想や学び

私はヨーロッパに行くことが初めてだったので出発前はとても不安だったが、周りの人の助けもあってとても充実した7日間を過ごすことができた。スウェーデンには仕事の合間にお菓子を食べ、コーヒーや紅茶を飲みながら休息をとる FIKA という文化がある。訪問先の職員の方が FIKA の準備をしてくれていたり、訪問先の学校の生徒がクッキーを焼いてくれていたり、とても暖かく迎え入れてくれた。

また、スウェーデンで印象に残ったことの一つは街並みだ。石造りでカラフルな屋根の建物が連なる様子がとても綺麗だった。他にも公共交通機関に乗ったり、現地のスーパーマーケットと買い物したりと、福祉を学ぶこと以外にもスウェーデンの雰囲気を自分の肌で触れる経験ができたことをとても嬉しく思う。

2. 特に印象に残っているエピソード

研修で話を聞いている中でよく出てきたと感じた単語が2つある。それは権利や自己決定という言葉だ。例えば病院では、子どもであっても人形でこれからの治療を説明し、できる範囲で自己決定を行う。保育園ではイラストを使ってこれからの日程の説明や意思疎通を行っていた。例えば子どもであっても相手には自己決定を行う権利があり、正しい情報を知る権利があること。その時に、もし言葉が伝わりづらいのであれば、イラストや人形を使うなど工夫や努力をするべきだという考えを学ぶことができた。面倒だからと伝えることを諦めてしまったり知るための障害があったりするような状態は避けなければならないのだと思った。

3. 今後に向けて

誰にでも正しい情報を知り判断する権利があるという点について私の周りで考えてみると、工夫が足りてないと思う部分がある。例えば、私のアルバイト先のドラッグストアでは聴覚障害の方に薬の説明が必要かどうかを尋ねる手段はおいていない。このような情報を得る上での障害についてこれからもっと考え実行に移していきたい。また権利という点と関連して、訪問先では子どもの権利条約に則って、という話もよく出ていた。私自身は将来は子どもに携わる職業に就きたいと考える一方、子どもの権利条約についてあまり知識がないと感じた。そのため子どもの権利条約など子どもの権利についても勉強していきたい。

夢見たいな一週間

夏 涵沁

1.海外研修全体を通しての学びや感想

研修に行く前に、初めて集団活動に参加することへの不安と、ビザ申請のトラブルが続いたこともあり、少し大変に感じていた。しかし、実際に現地に行ってみると、皆さんののおかげで、本来ただ疲れるはずの長時間のフライト、現地のスーパーでの買い物すら楽しいことになり、成田空港に到着した瞬間、「夢見たいな一週間が終わってしまった」とがっかりし、約三ヶ月が経った今でも、当時の色々な楽しいシーンがふとよみがえてくる。特に北欧人が人との距離感が遠いというステレオタイプを思い込んでいたが、実際の現場は違うことを体験した。ストックホルム大学生との交流や、小学校の先生との会話、病院スタッフさんのインタビューなど、さまざまな場面で多くの方が声をかけてくださり、流暢な英語を話し、他国の状況に関心を寄せる姿勢が強く心に残っている。

2.特に印象に残っている出来事やエピソード

この研修を通して最も勉強になったのは、子どもに自由に選択する権利を与え、自主性を育てる重要性である。特に印象的なのはプリスクールを見学し、クラスに入るとき、ある男の子が大勢の人に慣れていない様子で、私たちが挨拶した瞬間、側にいる先生の後ろにそっと隠れた。そこで、先生は子どもに挨拶を返事すると強制するのではなく、子どもを安心させながら、私たちの話を子どもに翻訳し、自然に交流を促していた場面が記憶に残っている。庭での自由時間において、屋外の遊びが苦手な子どもでも参加できるように、絵本や色鉛筆が屋外のテーブルに用意されているなど、子ども全員が決まった同一の活動を求めるのではなく、一人一人の性格と趣味を尊重し、出来るだけ子どもが自由に選択できるように努めていると感じた。小児病棟の説明会でも、病気を抱えることで子どもが選択できないが増えるため、「診療室でどこに座る」「どのお菓子にするか」など些細なことまで、自己決定を最大限に与えることの重要性が教わった。

3.今後に向けて

ストックホルムの教会や美術館などほとんどの公共施設に、絵本やおもちゃが置かれた子ども向けのスペースがあることに最初に驚いた。もしこの研修に参加するチャンスがなく、観光として訪れていたなら、スウェーデンが子どもための支援が整っていることへの理解がその程度に止まるのであろうか。今回の研修での実体験を通して、設備と施設などハ

ード面の完備だけではなく、福祉最進国の医療、教育の現場での取り組み、専門家たちの意識と価値観について知ることもできた。少し残念に思ったのは、私自身の能力不足や勉強不足があり、日本との違いを実感しつつも（例:スウェーデンではスクールカウンセラーが知能検査を行っていること）、その背後にある理念の差まで理解できていない点である。今後さまざまな国の状況を知りながら、心理支援のあり方について考えていきたい。

スウェーデン研修を終えて

荻野依那

1. 海外研修全体を通しての学びや感想

実際にスウェーデンを訪れたことで、国全体で子どもの権利を保障する姿勢が非常に重視されていることを学ぶことができた。市役所の制度面、プレスクール、小児病院など、子どもに関わるあらゆる領域で「国連子どもの権利条約」に基づいた仕組みが明確に整えられていることを実感した。

また、町全体が緑豊かで環境への配慮が感じられた点も印象的であった。自転車利用者が多く、自由に駐輪できるスペースが確保されていることも、自転車利用の促進につながっていると考えられる。個人的に、自転車で移動しやすい環境づくりは重要だと考えているため、スウェーデンのまちづくりは非常に魅力的に感じた。

2. 特に印象に残っている出来事やエピソード

特に印象に残ったのは、小児病院での取り組みである。日本では複数の入院患者が同室というイメージが強いが、カロリンスカ大学病院の小児・新生児領域では1部屋に子ども1人が基本であり、さらに親のためのベッドまで用意されていたことに驚いた。「家族中心ケア」を重視した医療モデルを採用しており、親がそばにいて付き添うことを前提にケアが設計されていることがよく伝わってきた。

また、入院しながら授業に参加できるロボットの導入や、学校の学外活動を病院内でも積極的に実施していることなど、治療と子どもらしい生活を両立させる環境整備が徹底されていることを肌で感じた。

さらに、障害のある子どもも含めて、高等学校を自分で選択できるように、中学校時に1週間ほどの体験期間が設けられている点も印象的だった。子どもや障害者など、社会の中で声が拾われにくい存在に対して意識的に自己決定が尊重されていることがわかった。プレスクールでも、必要に応じて心理士や特別支援教員が関わることで、インクルーシブな環境が整えられていると感じた。

3. 今後に向けて

子どもの自己決定を支えるためには、単に機会を提供するだけでなく、意見を伝える架け橋となる専門職の存在が重要であると学んだ。子どもに必要な情報や多様な支援を整えたうえで自己決定を促すことで、“自己責任論”に陥らない安全な環境が保たれると感じた。日本でも自己決定の尊重は重視されつつあるが、より適切な情報提供や支援につながる仕組みづくりが必要だと考える。

また、日本にいと自国の制度を客観的に見る機会が少ないため、今後も積極的に海外に目を向けたいと感じた。今回の研修で得た学びや気づきをふまえ、良い点と課題の両面から自分たちの社会を見つめ直しながら、「自分の生き方を選択して生きられる社会」とは何かを多様な視点から考え続けていきたい。

自分にとっての大きな経験

中野杏那

1. 海外研修全体を通しての学びや感想

本研修では福祉国家と呼ばれているスウェーデンを訪れた。私は入学した当初からこの研修の存在を知っており、機会があれば行きたいと思っていたため今回この研修に参加することが出来て本当に良かったと思っている。スウェーデンで過ごした1週間は自分にとって刺激あふれるものだった。福祉国家ということは前々から知ってはいたが、実際に訪れてみると自分の想像以上に制度が整っており、国民ファーストな国だと感じた。実際に行ってみないと分からない部分を本研修でたくさん学ぶことが出来た。実際に行ってみて感じたことは、今までは日本が一番住みやすいと感じていたがスウェーデンで過ごしてみていかに日本が窮屈で縛られた国であるのかを知れた。本研修では引率の先生方をはじめ、たくさんの方々に協力してもらい充実したスウェーデンでの1週間を過ごすことが出来た。

2. 特に印象に残っている出来事やエピソード

自分の中で特に印象に残っている出来事は、研修で自由視察の日があったのだが班のメンバーとストックホルム市内を歩いていた際に日本語で話しかけられたことである。その話しかけてくれた学生の方は大学で言語学を専攻している学生だった。また、現地の大学生と交流する機会があったのだがその交流会に参加していた学生の何人かは日本語を話してくれた。自分が思っていたよりも日本語を話せる方が多くとても驚いたのを覚えている。また、市内のレストランに入った際にそのレストランで日本の曲が流れていて驚いた。日本から遠く離れているスウェーデンでも日本の文化が伝わっているのを感じ、嬉しい気持ちになった。

3. 今後に向けて

今回の研修を通じてスウェーデンの素晴らしさを肌で感じるとともに、日本と海外の生活様式の違いであったり、それぞれの価値観の違いであったりを感じることが出来た。福祉の面での学びもたくさん得ることが出来た。この研修で得られた学びは今後自分のゼミにもつながってくると考える。研修で得られた、たくさんのことを学問的な面でも、生活の面でも今後生かしていければいいなと思っている。とても実りある海外研修にすることができ、自分の人生においてすごく大きな経験になったと感じている。

海外研修を通して

安原奏美

1.海外研修全体を通しての感想や学び

私は入学時にこの海外研修のことを知り、ずっと参加できたらと考えていた。しかしいざ募集がかけられたときは行ったこともない遠い国に一週間も滞在することに不安があり、参加するかすごく悩んでいた。でも今はあの時思い切ってチャレンジして本当に良かったと思っている。スウェーデンでの一週間は毎日が驚きの連続で、海外研修に挑戦しなければできなかった経験ばかりで、普通に大学生活を過ごしていたら感じる事が出来なかっただろうと思った。

2.特に印象に残っているエピソード

研修の中で特に印象に残っているのは、現地の小中学校での生徒に対する支援の手厚さである。日本でも不登校など心理的な問題を抱えた生徒に対してカウンセリングをするなどの対策がなされているが、スウェーデンではそれをはるかに超えるサポートがなされていた。まず一つ目は、校内で生徒のための健康チームが組まれていることである。校長・副校長・臨床心理士・カウンセラーで構成されており、週に一回集まって生徒一人ひとりについてミーティングをしている。さらに月に一回学校全体やクラスなど総括的なことについてのミーティングを行っている。生徒や親からの申し出がきっかけで支援が始めるのではなく、日ごろから生徒一人一人について理解していくことで未然に防ぐことにつながると感じた。二つ目は、セラピードッグが導入されていることである。校内の支援でここまでの対策がなされていることにすごく驚いた。週に二回来校し、生徒の意向に沿ってセラピードッグと協力ゲームをしたり、触れあったりすることで気持ちを落ち着かせることが出来る。このように、学校という子供たちが毎日通う場所を、勉強だけでなく生徒の生活を支える場として作られていると感じた。

3.今後に向けて

この研修での大きな気づきは、英語は伝わるか伝わらないかにこだわらず、自信をもって話すことの大切だということである。みんなでスーパーに行ったときに、テイクアウトを注文しようとしたら店員さんが声をかけてくれた。でも自分の英語で伝わるのか不安で話すのをためらっていたら「英語は話せないの?」と言われた。この言葉を言われて少しショックだった。そのあととりあえず自分の英語で話してみたらちゃんと理解して受け取

ってくれたが、自分がスムーズにできなかったことが悔しかったし、コミュニケーションで正しさにこだわる必要はないと強く感じた。今後はもっと積極的に自分からはなせるように英語力に磨きをかけていきたい。

個人報告書

一本鎗優来

1. 海外研修全体を通しての学びや感想

私が初めて海外に行ったのは小さい頃だったため実質初めての海外だったのだが、目に映るものすべてが新鮮で驚きっぱなしの9日間だった。スウェーデンというとIKEAばかり思い浮かべていたのだが、国全体が広いIKEAのようで建物や食べ物、匂いまで全てが日本と違っていた。特に食べ物に関しては、白米を食べる文化がなくパンが多い分、スーパーに並んでいる種類が豊富だと感じた。また、私は事前学習でスウェーデンのベビーカー文化について取り扱ったのだが、ショッピングモールでベビーカー置き場を見ることができなかったのは心残りだ。しかし、街中を走るバスにはベビーカーや車椅子を置ける広いスペースがあり、さらに固定するためのベルトが吊り下がっていることは確認できた。事前学習で知識を得たことを実際に自分の目で確認することができると、より学びが深まりとても良い経験になった。今回の研修に協力してくれた方々全員に感謝したい。

2. 印象に残っているエピソード

私が最も印象に残っているのは、現地の大学生との交流会で学生が言っていた言葉だ。スウェーデンの消費税は25%で日本よりもかなり高く設定されている。そのため、私は物価の高さに驚きながら過ごしていた。現地の大学生に高く感じないのか聞いてみたところ、「税金は高いと感じるけど、その分色々なところにそのお金が還元されてるから、気にならない」とのことだった。事前学習にて、スウェーデンの福祉制度が整っているのは税金が高いからだという発表をしていた班があったが、現地の学生がその実感を持っていることを確認できた。私たちの予想ではなく、実際にその国に住んでいる人の口からその言葉を聞くことができたのは、答え合わせができたようでとても嬉しかった。

3. 今後に向けて

私は海外研修への参加を通じ、英語習得の必要性を強く認識した。スウェーデンの主要言語はスウェーデン語だが、多くの国民が高い英語能力を持っていて、日常的なコミュニケーションを英語で行うことが可能だ。また、スウェーデンにおいて特徴的なのは、人と人の心理的距離が日本と比較して近い点だ。もしかしたらスウェーデンに限ったことではないのかもしれないが、そこには日本との圧倒的な違いがある。実際に、道を歩いていると日本に関心を持つ学生から突然声をかけられたり、中学校訪問時には生徒にいきなり髪

色を褒められるなど、初対面の相手との交流に抵抗がなく、それが日常的に行われているのだと感じる場面がたくさんあった。しかし、彼らが言っていることを理解することはできても、十分に応答できず円滑なコミュニケーションには至らなかった。この経験から、これまでの英語学習が必ずしも実践的ではなかったことを痛感した。今後、他国に行った際に自分の学びや知見を広げていくためにも、実用的な英語能力の向上に継続して取り組む必要があると考えた。

海外研修で得たこと

渋谷明日香

1. 海外研修全体を通じての学びや感想

私は今回の海外研修で日本とスウェーデンの人々の価値観の違いだけでなく、共通の価値観を持っていることに気づくことができた。この海外研修が初めての海外経験であったため、生活環境や文化の違いについていけるかどうか不安があった。実際に行ってみると、もちろん食文化や町の様子はずいぶんと違いがあったが、街を散策したり現地の人と交流してみると意外にも日本の環境や自分と似ているところがあると感じた。違いを見つけることも時には必要だと思うが、似ている部分・通ずる部分を見つけることで他の文化の人と心を通わせることができるのかもしれないと考えられるようになった。

また、研修先では多くの人と交流することができたと感じている。ストックホルム大学の学生とはゲームやピザパーティで親睦を深めることができ、プレスクールや小学校、知的障害者向けの高等学校でも児童・学生と交流することができた。ただ知識を得るだけでなく、現地の人とながら体験ができたことはとても貴重な経験だったと感じている。

2. 特に印象に残っている出来事やエピソード

私は市内自由視察の日にはたまたま再会した現地学生との出来事が特に印象に残っている。自由視察の前日の午後は現地大学生との交流があった。そこでは日本の漢字やアニメ、日本の興味深いところなど、様々な話題でたくさんの学生と交流することができた。その中でストックホルム大学のツアーをしてもらった学生とは特に多くの話をすることができた。自由視察の日には私たちはお土産を探すために主要な観光地である、ガムラスタンを訪れていた。そこで前日に親睦を深めた学生と再会することができた。少し立ち話をしていると私たちの事情を聴いて、自宅に案内してくれた。その後、少しの間一緒に行動することができ、とても心強かった。その方は他の国への留学経験もあって、土地勘のない私たちの不安を理解し、安心させてくれた。このようなやさしさが特に思い出として残っている。

3. 今後に向けて

今回の研修を通じて、実際に現地に足を運んで、現地の人の話を聞くことでしか得られないものが多くあるのだと実感した。事前学習では福祉、地域、心理に関するスウェーデンの制度や施策について多くの知識を得たと思っていた。しかし、研修先ではさらに具体的な話を聞き、多くの貴重な体験をすることができた。日本から遠く離れた場所で起きている出来事は私たちが情報として知るよりもはるかに速いスピードで進んでいる。様々な制度が世界の先駆けとされるスウェーデンに実際に訪れることで初めてその新しさにリアルタイムで触れることができた。

私はこの経験を生かして、これからも多くの場所に実際に訪れていきたいと思うようになった。書籍やインターネットで得られる知識ではなく、自分で見て感じる体験を積極的に行っていきたい。

スウェーデン研修を終えて

中川莉那

1. 海外研修全体を通しての感想や学び

私は今まで、様々な環境に置かれる子供たちと関わる活動を国内外で行ってきて、福祉国家と言われるスウェーデンの子供たちは実際にどのような環境で過ごしているのか、どのような教育を受けているのかを自分の目で見るのが、本研修に参加した一つの目的でした。そんな私が今回の研修を通じて最も強く印象に残ったのは、医療施設内で見学した「小児病棟学校」の取り組みです。ここでは病気と闘う子供たちが不安なく検査や治療を受けられるよう、ぬいぐるみや実際の医療機器の模型を使ったプレパレーションが丁寧に行われていました。子供だましではなく、子供を一人の人間として尊重し、遊びや対話を通じて「自分自身に何が起きるのか」を分かりやすく説明して納得してもらう。そうすることで子供自身の恐怖心を取り除き、主体的に治療に向き合えるようにサポートするという仕組みには本当に驚かされました。医療・教育・福祉が連携し、子供の権利を徹底して守るスウェーデンの社会システムの一端を肌で感じる事が出来たとてもいい機会だと思いました。

2. 特に印象に残っているエピソード

やはりなんと言っても、Fika は強く印象に残っています。研修中、訪問する先々で必ずコーヒーや紅茶、そして甘いお菓子が振る舞われ、リラックスした雰囲気の中で会話を楽しむ時間が設けられていました。これは単なるおやつ休憩ではなく、コミュニケーションを円滑にし、生活にゆとりを持たせるための大切なスウェーデンの文化だと知りました。実際に体験して適度な休憩を挟むことでリラックスでき、その後の活動にもメリハリがつけました。日本の企業や組織でも Fika のような時間を導入できれば、精神的な余裕が生まれ、業務効率も向上するのではないかという新たな視点・考えを得ることができました。

3. 今後に向けて

スウェーデンは涼しく、街並みは想像していた以上に美しく憧れていたヨーロッパそのものでした。物価の高さや公共トイレが有料であることなど、日本との違いに戸惑う場面もありましたが、それ以上に生活のしやすさや居心地の良さは格別でした。帰国日に暑苦しい日本には帰りたくないと思えるほどスウェーデンでの生活を満喫できました。

「次、海外に行くなら絶対にまた北欧がいい！」そう心から思えるのは、この研修で得た経験が自分にとってかけがえのないものになったという証拠だと思います。今回の研修で学んだ子供主体の支援のあり方や、心豊かに生きるためのライフスタイルの考え方を、今後の大学での学びや自身のキャリア、そして日々の生活にも積極的に活かしていきたいと思っています。

スウェーデン海外研修を終えて

福岡友陽

1. 海外研修全体を通しての感想と学び

本研修では、福祉先進国として知られるスウェーデンを訪れ、制度だけではなく、現地の生活文化や人々の価値観に触れる貴重な経験を得ることができた。実際に現地に足を運び、街の雰囲気や人々の暮らしを自分の目で見たことで、知識が具体的で立体的なものへと変わった。

特に印象的だったのは、スウェーデンの多くの人が“心のゆとり”を持ちながら生活しているように見えたことである。東京のように急ぎ足で歩く人は少なく、公園や街角でのんびりと会話をを楽しむ人々の姿が多く見られた。また、圧倒的に人々の笑顔が多いことがとても印象的だった。さらに、福祉施設の視察を通して、幼児教育から障害者支援までできないことがあるから支援しているわけではなく、「人を尊重する姿勢」が一貫しているからこそ福祉制度が整っていることがよく分かった。これらの体験は、単なる制度の比較ではなく、文化や価値観を理解する「異文化理解」の姿勢を養う学びでもあった。

2. 特に印象に残っているエピソード

一番印象に残ったのは子供世代に対する価値観の違いである。スウェーデンでは子供のことを「市民の一番若い人たち」として捉え、できることを少しずつ増やすではなく、様々な社会問題を年齢に合わせて触れ、必然的学ぶことができる点が素晴らしいと思った。また、研修先の多くで経験した「Fika（フィーカ）」の文化も印象深い。忙しい日中でもコーヒーやお菓子を通して同僚と会話する時間を確保することで、職場コミュニケーションが円滑になり、心身のリフレッシュにもつながっている。日本の職場文化と比較すると、労働と休息のバランスへの考え方の違いを強く実感した。

3. 研修で見た課題と今後の学びに向けて

今回の海外研修を通して、学問的な学びだけではなく、日本以外で生活する人の生活様式や価値観についてより近い距離で触れることができた。学問的な学びは今後の講義やゼミ等での新たな視点として活かしていくことができると思う。スウェーデンで過ごし、多くのスウェーデンの良さを体感した分、日本の良さを改めて感じる事ができた。さらに、自分がどれだけ限定的なコミュニティで生活していたのかを実感した。視野を広げるためには、今回のような海外研修に積極的に参加するべきだと感じた。

海外研修を終えて

五十島 佳穂

1. 海外研修を通しての学びや感想

スウェーデンでの研修を通じて、福祉先進国としての社会システムや文化、人々の生活に深く触れることができた。スウェーデンは、歴史的な建造物が残るヨーロッパの雰囲気を持ちながら、電動スクーターなどのモビリティや交通網が高度に発展しており、バリアフリーに富んだ土地であると感じた。また、多様な国籍の人が暮らす多国籍社会であることも分かった。公共交通のバリアフリー化も進んでおり、多様な人々が利用しやすい環境が形成されていた。また、多国籍の住民が共生している点も特徴的であり、社会の多様性が日常生活に自然に取り込まれていた。

福祉政策に関しては、国が主導して制度設計を行い、公立・私立を問わず学校の費用が一律であることから、利用者が自身に適した学習環境を選択しやすい仕組みとなっていた。日本では減税を求める議論が活発であるが、財源の使途次第では格差の縮小や生活の質向上につながる可能性があると感じた。

また、学んだ視点として、虐待にあった場合に児童養護施設ではなく里親を手配するなど、家族単位のケアを重視していることが分かった。家族単位のケアは、子どもにとってより細やかなケアを提供できる良い環境だと感じた。

街並みは地震が少ない土地であるため、昔の建造物を最大限に活用されており、非常に綺麗であり、自動車よりも人を中心とした街づくりとなっていた。

2. 特に印象に残っている出来事やエピソード

研修で特に印象に残っていることは、ストックホルムの学生との交流である。現地の人と英語を用いてコミュニケーションをとることができた。スウェーデンの方々は、普段スウェーデン語を利用しているようであったが、英語もネイティブのように使いこなしていたことが印象的であった。また、日本文化に関心があるということで、かなり距離が離れているが来日したことがあるということに驚き、日本文化がヨーロッパ圏でも浸透していることに驚いた。

また、自由行動の日に交流した留学生と偶然再会するという珍しい経験もあり、偶然の出会いの価値についても深く感じた。他にも小学校に訪問した際、わずか数分間であったが、子ども達が私たちが乗るバスまでお見送りをしてくれ、校庭の花を持ってきてくれた。この数分間は、かけがえのない時間であったと感じた。これらの交流を通じて、たとえ一時的なものであっても、出会い交流する一期一会の価値について考えることができた。

3. 今後に向けて

福祉先進国の制度を実際に視察した経験は、私自身の学びを深め、視野を広げたと感じる。日本においても、賃金格差をはじめとした構造的な不平等を是正し、生活上の課題を抱える人々が負の連鎖から抜け出せる支援体制を整えることが求められている。

また、課題が深刻化する前に予防的な支援が行き届く仕組みづくりを探究し、将来の福祉現場に還元していきたい。さらに、スウェーデンが「福祉国家」と同時に「多国籍国家」として成熟している点は大きな示唆を与えてくれた。今後、日本もグローバル化に伴い多国籍化が進むことが想定される中で、文化的背景の違いや価値観の多様性がもたらす課題にどのように向き合うかを考えることは、未来の福祉の発展にとって不可欠である。また、スウェーデンの政策の中には、日本でも部分的に導入されているものが存在する。しかし同国では、政府・制度・法律の整備によって地域格差が生じにくい特徴がある。この点は、日本が今後の政策形成の参考とすべき重要な視座である。地域によって支援の厚みに差が生じないよう、全国的に均質性の高い福祉制度を確立していく必要がある。

海外研修を終えて

齊藤愛莉

1. 海外研修全体を通しての学びや感想

今回の海外研修は、私にとって人生で初めての海外であり、出発前は楽しみよりも不安の方が大きかった。言葉が通じるのか、現地の生活にうまくなじめるのか、トラブルが起きたらどうしようと緊張していた。しかし、スウェーデンに到着してみると、街の落ち着いた雰囲気や、ゆったりとした時間の流れ、そして現地の人たちのやさしい対応に触れ、少しずつ不安がなくなっていく。スウェーデンの生活では、仕事だけでなく家族や友人との時間を大切にしていることがよくわかった。コーヒーや紅茶、お菓子を食べて休憩をしながら気軽に会話を楽しむ「FIKA」という時間があり、コミュニケーションを大切にしていってとても素敵な文化だと思った。

福祉施設や教育現場の見学では、日本と違う考え方や制度を知ることができて勉強になった。子どもたちが自分の意見を尊重されながら生活している様子や、地域や社会全体で子どもを支えている環境を見て、国によって福祉の形はさまざまなのだと実感した。

2. 特に印象に残っている出来事やエピソード

私が特に心に残っているのは、現地の大学生との交流である。私は英語に自信がなかったが、ジェスチャーや簡単な英語を使いながら話すと、相手が真剣に理解しようとしてくれた。通じたときは本当に嬉しく、言葉がうまく話せなくて伝えようとする気持ちが大事なのだと気づくことができた。自分が思っていたよりもコミュニケーションが取れたことで、少し自信にもつながった。

3. 今後に向けて

今回の研修を通して、私は日本とは違う文化や価値観に触れ、視野がとても広がったと感じている。初めての海外で不安もあったが、思いきって参加したことで、新しい発見や学びをたくさん得ることができた。また、英語の必要性も強く実感したので、これからも勉強し、次に海外へ行くときにはもっと積極的に交流できるようになりたい。この研修で得た学びを忘れずに、多くの視点から物事を考えられるよう努力していきたい。福祉制度についてもより深く学んでいきたいと思った。

海外研修を終えて

檀上 蒼

1. 海外研修全体を通しての学びや感想

私は入学する前からスウェーデン研修に絶対参加したいと思っていた。行きたいと思ったきっかけは、大学のパンフレット見たときに福祉を学ぶ上で海外に行けるプログラムがあるのは珍しいと思ったこととスウェーデンに実際に足を運んで福祉を学ぶというのは社会人になってからでは難しく、めったにない機会だと考えたためである。スウェーデンに行って驚いたことは、日本とは違うところが多いという点である。建物が赤や薄ピンク、黄色といったカラフルな色合いで暖かみを感じた。駅も電車に乗るときだけカードをタッチして降りるときはタッチしないでゲートが開いて降りるなど日本ではできないことも経験して、とても貴重な時間を過ごすことができ、行って良かったと感じている。

2. 特に印象に残っている出来事やエピソード

印象に残っていることは現地の小学校を訪問したことだ。訪問が終わってバスを待つまでの間、小学生の子が話しかけてくれた。スウェーデン語で話しかけられたのだが、話せないと伝えたら英語で話してくれて名前や歳、学年などの簡単なことを話したのだが、最後にはハグをして小さいお花までプレゼントしてくれた。10分ぐらいだったとはいえ、ちょっとした時間でもフランクに話しかけてもらえたことが嬉しかったし、人によるのかもしれないが、全体的に人見知りをしている人が少ないように感じた。また、「フィーカ」もとても印象に残っている。これは、コーヒーや紅茶とお菓子を楽しむ伝統的な習慣だ。実際に訪問した先でもフィーカの時間があり、最初は驚いたが、ほぼ毎日フィーカを経験してとても楽しいと感じた。フィーカはなぜ取り入れられているのかと質問したときフィーカは「プライベート」と「仕事」の時間をしっかり分けて単なる休憩時間ではなく、家族や友達と一緒にリフレッシュするため、この誰かと一緒にというところが大事なポイントであると言われたのが印象的でこれは日本でも簡単に取り入れることができると思った。

3. 今後に向けて

私は今回の研修に参加して福祉の面以外にスウェーデン独自の文化を経験し、日本とは大きく違うことを実感できた。個人的な反省としてスウェーデンと日本の福祉を比較することを軸としていたのにスウェーデンの福祉については知識を得ることができたが、日本の福祉の制度やその仕組みについて詳しく知らなかったために、どう比較していいかわからず、事前に詳しく調べていたら比較できるところを重点的に学べたのではないかと思った。これからの授業でその点を重心に深く学んでいきたいと考える。

海外研修を終えて

奥原蒼葉

1.海外研修全体を通しての学び

大学に入学する前からこの海外研修プログラムについて存じており、入学した際には必ず参加したいという強い思いを抱いていた。応募する前は、選考に通るかどうか不安もあったものの、「挑戦して後悔した方がいい」と考え、この海外研修に応募した。そうして始まった研修では、私の人生においてかけがえのない多くの学びや経験を得ることができた。人のあたたかさ、充実した福祉制度、美しく保たれた街並みなど、スウェーデンでは当たり前とされるものが、私にとってはどれも新鮮で刺激的だった。特にスウェーデンの人々や文化から、人を思いやること、そしてそのために必要な心の余裕を確保することの大切さを、研修全体を通して強く感じた。始めは迷いもあったものの、研修を終えた今、“挑戦して本当に良かった”と心から思える。そんな充実した1週間を過ごすことができた。

2.特に印象に残っている出来事やエピソード

特に印象に残っているのは、小学校訪問での出来事であった。他の訪問先と同じように職員の方々のお話を聞き、施設を見学し終え、帰りのバスを待っていると、校舎から出てきた子どもたちがこちらに集まってきてくれた。バスが来るまでの間、子どもたちと、お互いの第一言語ではない英語で楽しく会話をした。中には花を摘んで花束にして渡してくれた子や、帰国後も連絡が取れるようにと私の SNS アカウントを聞きに来てくれた子もあり、その温かさに胸が熱くなった。そして、バスが到着して小学校を離れるとき、走ってバスを追いかけてくる男の子たちの姿を見て、思わず涙が出そうになったことを今でも覚えている。子どもの持つ明るくまっすぐなパワーは、世界共通なのだと実感すると同時に、一人でも多くの子どもの幸せを守っていかなければならないと、改めて感じさせられた出来事であった。

3.今後に向けて

私はこれまで正直、福祉に対してどこか地道で広がりがない仕事だという先入観を抱いていた。しかし、スウェーデンで訪問した施設で出会った福祉関係者は皆、福祉に真剣に向き合い、人々の暮らしを支える自分たちの役割に誇りをもっていた。その姿から、一人ひとりの生活を支えるという小さな関わりの積み重ねこそが、社会を確かに動かしているのだと気づいた。この経験を通して、私も人々の生活に寄り添い、日々の暮らしを支えられる存在になりたいと強く感じた。そのためにも、これから福祉に対してより真摯に向き合い、自分自身の学びをさらに深めていきたいと思う。

海外研修を通して

平野佐奈

1.海外研修を通しての学びや感想

私はこの海外研修に参加をしてとても良かったと感じている。法政大学に入学した時からスウェーデンへ海外研修に行けることがとても魅力的で行ってみたいと思っていた。参加できると知ったときはとても嬉しいのと同時に私にとって初めての海外ということもあり、不安な気持ちも生まれた。しかし、スウェーデンで様々な刺激を受けたことでより視野も広まり、成長できたと思う。ただの留学とは違う、法政大学の海外研修に参加できたことは私の人生の中で大きな宝物となったと感じている。

2.特に印象に残っている出来事やエピソード

一番印象に残っているのは、現地の大学生との交流会だ。私は英語が得意ではなく、うまくコミュニケーションをとれるだろうかと、交流会の日は朝から不安いっぱいだった。しかし、交流した大学生は日本語がとてもうまく、楽しく話すことができた。日本の文化を体験してもらう際に、けん玉のコツを教えるために勇気を出して英語で伝えてみた。私のつたない英語を理解してもらえたとし、何より母国語以外でコミュニケーションをとることができたのがとても嬉しい経験となった。

また、スウェーデンの日本料理屋さんで海鮮丼を食べたのも印象的だった。メニューが全てスウェーデンの言葉で書いていて難しかったが、店員さんが英語でこういう料理ですと教えてくれた。料理を頼むとお味噌汁を飲むことができた。もちろんスウェーデンの料理は全部とてもおいしかったが、久しぶりに飲んだお味噌汁はとても沁みておいしかった。その瞬間少しだけ日本が恋しくなった。私はサーモン丼を頼んだが、マンゴーが乗っていたりナッツのようなものが乗っていたりと、日本のものとは少し違っていた。しかしとてもおいしかった。

3.今後に向けて

スウェーデンでたくさんのお話を聞き、日本だけでなく世界の多様な福祉のあり方について興味を持つことができた。これからは、日本の福祉の型にとらわれない、柔軟な考え方を持って授業や就職活動で活かしていけたらと思う。また、英語をもっと話せるようになって、出身国を問わず楽しくコミュニケーションが取れるようになればいいなと感じた。

海外研修を終えて

窪山 堅斗

1. 海外研修全体を通しての学びや感想

私は幼少期に二度ほど渡米の経験があるが、自分で英語を話す機会という意味では初めての経験であった。正直な所、渡航前は本当に自身の語学力で意思疎通できるか不安だったのだが、現地の大学生の皆様や土産屋の店員の方々と楽しく会話することができ、自信を持てるようになった。何事も、実践に勝る経験はないのだと改めて実感させられた。

実際にスウェーデンを訪れて一番驚いたのが、その国民性の違いである。道行く人、各施設の方々を見てきたが、皆が非常におおらかで寛容なのだ。例を挙げれば、横断歩道を渡る際、車が道を譲ってくれないということは唯の一度も無かった。皆が午後五時ぴったりに退勤するという話も初めは半信半疑であったが、それが本心からのものだと知り、非常に感銘を受けた。自身の属するコミュニティから離れて全く異なる価値観を持つ集団に加わるという経験が、自分や自分の属する集団の在りようを見直す上で非常に大きな意味を持つということを、心から理解することができた。

2. 特に印象に残っている出来事やエピソード

上記の話の延長線にはなるが、各訪問先の職場の雰囲気には大いに驚かされた。ティレソのオフィス、病院、学校どこ一つ取っても堅苦しい雰囲気がなく、(本当の意味で)アットホームな印象を受けた。更にはフィーカという北欧流のコーヒーブレイクを業務の間に“必ず”はさむというのみなかなか衝撃的だった。タイムイズマネーの精神から来る効率重視の体制ではなく、ちゃんと職員一人一人が人間らしく働けるよう努めているのがよく感じられた。極めつけは、スウェーデンに残業がないという話だ。日本では基本的に残業はあって当たり前、という職場がほとんどだが、その話をプレスクールで働いておられる先生方に話してみたら大層驚かれた。我々は家族と過ごす時間と仕事の時間は明確に分けているため、そのような話は信じられない、と言われたのだ。確かに働くことも大切だが、それ以上に家族と過ごす時間を確保し、人間らしい生活を満足に送れることを重視しているのだということが言葉の節々から伝わってきた。

3. 今後に向けて

今回の研修を通じ、異なる国で多様な分野の仕組みや思想に触れることができ、知見を深めることができた。その一方で、それらはあくまで“スウェーデンに合った”ものであり、そっくり自国の制度に当て嵌めることが出来ないことも知れた。だからこそ、今後は日本の福祉制度についてより深く学び、スウェーデンを含む各国と日本の制度を比較した

上で、日本が海外から学ぶべき点、取り入れるべき制度は何かを探して行く所存だ。

人を思う仕組みが整う国、スウェーデン

田中天琉

1. 海外研修を通しての学びや感想

今回のスウェーデンへの海外研修は福祉国家として知られるこの国の仕組みを実際に目で見る貴重な機会となった。これまで北欧は福祉が充実しているという知識としての理解はあったが、実際に現地で生活や教育、医療の場を見学することでその根底にある「人を大切にする文化」を強く感じた。特に印象に残ったのは、子どもへの徹底した配慮である。病院を訪れた際に小さな子どもが検査を怖がらないよう、医療スタッフが小さな模型や人形を使って事前に検査の流れを説明するというのを聞いた。見慣れない機械に対する恐怖を少しでも和らげるためのこのような細やかな工夫は、日本ではあまり見られないものであり、医療が患者中心であることを象徴しているように思えた。

また、大学までの教育費が無償であることも大きな特徴である。家庭の経済状況に左右されず誰もが自分の望む進路に進むことができるという制度は、子どもの可能性を最大限に引き出す土台となっている。日本では進学に費用がかかるためどうしても家庭の負担や経済力が進路選択に影響してしまう。しかし、スウェーデンではその制約がほとんどない。こういった環境が、個々の能力や将来をのびのびと育てることにつながっていると実感した。

2. 特に印象に残っているエピソード

研修中で特に印象的だったのは、現地で日本語を話せる学生が想像以上に多かったことである。自由行動中に友人と話していると、現地の学生に突然日本語で声をかけられ驚いた。話を聞くと言語学を専攻している学生で、他にも交流会ではアニメを通して独学した学生までと様々で、日本文化がスウェーデンにも影響していることを誇らしく感じた。

その一方で物価の高さには終始驚かされた。外食は日本の二倍から三倍ほどの価格が当たり前で、交流会で紹介された本場のミートボール店では一食五千円近くかかり思わず声を失ったのを覚えている。しかし、この「高物価」と「高福祉」がどのように現地の人々に受け止められているのか知りたくて、交流会で学生たちに率直に質問してみた。「スウェーデンのように物価や税金は高いが福祉が充実している国」と「日本のように比較的物価は低いが福祉が限定的な国」のどちらが良いかと聞くと、全員が迷わずスウェーデンを選んだ。理由としては、生まれたときから保障が整った環境が当たり前であり、税金が高くてもその分が確実に生活に還元されている実感があるため高負担であっても不満を抱かないという点が挙げられた。進路や生活が家庭の経済力に左右されない社会は、非常に魅力

的だと感じた。

3. 今後に向けて

今回の研修を通じて最も強く感じたのは英語力の必要性である。伝えたいことがあっても言葉が出てこず、もどかしい場面が何度もあった。英語を話せるだけで交流の幅は飛躍的に広がり、世界の見え方そのものが変わることを実感した。今後は英語学習に力を入れ、より多様な価値観とつながれる自分になりたいと強く感じた。

スウェーデンの福祉政策と個人主義

岡崎 匡輝

1. 海外研修全体を通しての学びや感想

私は、今回幸運なことに現代福祉学部のプログラムである海外研修に参加することができた。法政大学には、より実践的な臨床心理学を学ぶために入学させてもらったが、臨床心理による支援について学べば学ぶほど、国民ひとりひとりの生活を陰から支える福祉政策もまた、精神科医の行う支援と同等、あるいはどこまで支援すれば良いかというケアの限度を決定するという点においては、公認心理師を目指す一個人として避けては通れぬものではないか、という考え私はいつのまにか持つようになっていた。そのため、今回の海外研修で、私はスウェーデンの福祉政策についての理解を深め、実際に福祉現場で働いている人々の声を聞き、今後の日本における福祉政策を改善するヒントを見つけることが目的となった。整然とした Odenplan 駅周辺、雑然とした Gamula Stan 駅周辺を歩き回り、Tyresö Kommun でスウェーデンの福祉政策の現状と課題等の話を施設職員の方々から聞いたりする中で、私はスウェーデンにおける福祉政策における日本との特異性は、スウェーデンの文化の中で醸造される個人主義にあるのではないかと考えるようになった。

2. 特に印象に残っている出来事やエピソード

個人主義という点において、私が最も印象に残ったのは LSS 法におけるパーソナル・アシスタンス制度である。このエピソードについて語る前に、LSS 法について軽く説明すると、LSS 法とは障害者各個人が他の健常者と同じような生活ができるようにすることを目標として立てられた法律であり、パーソナル・アシスタンス制度は、病院や医療スタッフの営業時間や決定に、非支援者本人が合わせることなく活動の内容やそれを行う時間、場所を完全に自分で決められる制度である。これは重度の認知症患者にも適応されるものであり、本人の意思決定能力が低下している場合、本人ではなくその関係者で本人の意思を推察し、実行する日本の福祉制度と比較しても、かなり異質なものであり、この法律について聞いた時はかなり驚いた。スウェーデンにおいては福祉政策のみならず、市の運営や働き方、ひいては病院でのケアのプランを患者自身に決定させるまでに至り、自分の意思・自己決定を尊重する気風がある。

3. 今後に向けて

スウェーデンでは福祉政策のみならず、仕事や働き方、ひいては病院の治療プランに至るまで個人の意思を尊重し、自己決定を促す特徴があることを私は今回の研修で学んだ。福祉政策で重視される、Well-being という概念においても、この言葉が個人や社会のより

良い状態という意味である以上、現代日本の福祉政策をより良いものにするためにこの自己決定の尊重という要素の是非について考えることは、福祉政策の是非を問う上で避けては通れないことである。私はこの個人主義という観点から、日本の福祉政策を見直し、その意義についての考察をこれからも続けようと思う。

一生忘れない経験

川崎舞花

1. 海外研修全体を通しての学びや感想

「緑と自転車が多い街」これは、初めて訪れたスウェーデンの街並みを歩く中で私が毎日思っていたことである。今回訪れたストックホルムは、緑が見えない場所が存在しないほど森林が豊富で、自転車置き場と自転車に乗った人で溢れている街だった。このような、緑が多く自動車が少ないという点で、ストックホルムは人にも環境にも優しい街であると思った。一方で日本は、特に都市部では開拓が進み、緑が減少する中で、自転車の利用者も減少傾向にあるように思う。したがって、日本はスウェーデンに比べ遥かに持続可能性が低く、未来の日本に対する危機感を持つべきだと強く感じた一週間だった。

2. 特に印象に残っている出来事やエピソード

印象的だったエピソードの1つに、交流会においてスウェーデンの学生と交わした、熱中症に関する会話がある。夏でも比較的涼しいスウェーデンでは、「熱中症」という概念が存在しないのではないかと純粋に疑問を抱き、「熱中症って知ってる？」と尋ねてみたところ、「聞いたことはあるけど見たことはない」と返ってきたことが衝撃的であったためだ。また日本では、熱中症対策グッズが注目されていること、熱中症で命を落としてしまう人がいることを学生に伝えたと、とても驚いた様子で興味を持って私の話を聞いてくれていた。この会話を通して、改めて日本の気温の異常さを身に染みて感じると共に、過ごしやすいスウェーデンでの暮らしを羨望した。

3. 今後に向けて

私は障害児の発達支援に関心があるため、今後は、今回訪れたプレスクールや特別支援学校で得た学びを実践に移していきたいと考えている。私は現在アルバイトとして発達支援業務に関わっているため、まずはその現場で、絵カードなどを使った意思疎通の方法を取り入れるように提案したい。また、児童と関わる際には、その児童が「できる」ことに着目し、個人のニーズに合わせた集中的な支援を行えるように職員と連携を図っていきたいと考えている。

また今回の研修では、障害を持つ子どもたちには特有の可愛らしさがあることを再確認することができた。皆のように言葉が流暢でなかったり、距離感を掴むことが難しかった

りしても、自分なりに感情を伝えようとしている生徒たちの姿を見て、やはり障害は可愛い個性であると実感した。そこで今後は、より一層「障害」ではなく「個性」として特性を捉え、障害児の支援に関わっていきたいと考えている。

スウェーデン研修レポート

若狭柊弥

1. 海外研修全体を通しての学びや感想

今回のスウェーデン研修では、教育・医療・福祉が「子どもの権利」を基盤に強く連携し、子どもを制度として支える仕組みが整っていることを実感した。プリスクールでは、すべての子どもが平等に教育を受ける権利を保障され、興味に基づくカリキュラムや家庭との協働、日常的な記録と振り返りが体系的に行われていた。また、民主主義や自己決定の考え方が現場まで浸透しており、環境づくりを含めて子ども中心の姿勢が一貫していた点が印象深い。さらに、街づくりや自然環境の保全がウェルビーイングと結びついていることも、スウェーデン社会の特徴として強く印象に残った。

2. 特に印象に残っている出来事やエピソード

最も印象に残ったのは、カロリンスカ病院での遊びを用いた心理支援である。遊びが治療的不安を軽減し、処置への主体的な参加を促す専門的介入として位置づけられており、痛みを曖昧にせず説明したうえで選択肢を子どもに残す姿勢は、信頼関係の形成において非常に重要であると感じた。学校現場では、怒りを示す児童の行動を表面的な問題と捉えず、その背景にある環境要因や情緒調整の困難を丁寧に理解し、代替行動を共に考える心理士の姿が印象に残った。また、精神科領域では FACT モデルに基づくチーム支援が行われ、支援者が家庭を訪問する形でつながりを保つ取り組みが、日本の支援のあり方を見つめ直すいい機会となった。

3. 今後に向けて

今回の研修を通して、個人だけでなく背景となる環境や制度を含めて支援を検討する視点が、臨床心理学において不可欠であることを改めて認識した。今後は、スウェーデンで重視されていた「子ども中心の視点」「多職種連携」「予防的・早期的支援」という考え方を、自身の学びや実践に取り入れたい。また、教育・医療・地域と連携しながら、問題の深刻化を防ぐ支援の形を模索し、広い文脈を踏まえて子どもと家族に寄り添える臨床家を目指したい。

スウェーデン研修を終えて

須藤茜

1.海外研修全体を通しての感想や学び

今回の海外研修が私にとっての初めての海外経験となった。たくさん不安もあったが、先生や京王観光の方、現地の方などの支えもあり、楽しく充実したより良いものになった。スウェーデンでは当たり前に受けられるサービスが日本にはなかったり、日本と異なる制度や考え方を学んだ。スウェーデンはまず、患者・子供・生徒などが良いサポートを受けられるようにと考えられている。ここが何かに縛られている日本とは違うところなのかなと思う。国民が生きやすいようにと考えられているのを肌で実感できた良い経験となった。

2.特に印象に残っているエピソード

この海外研修で特に印象に残っているのは、スウェーデンの人たちの人の良さ・フレンドリーさである。海外研修の中で、保育園、プレスクール、小児科病院、高校など様々な年齢の人がいる施設を訪問したが、どの訪問先の方もみんな挨拶をしてくれるのはもちろん、言語も違う私たちに笑顔で積極的に話しかけてくれた。緊張している私たちは、これで緊張がほぐれたと言ってもいいくらい嬉しいことだった。1日のうちのほんの少しの時間お話しただけでも別れるのを寂しいと言ってくれたり、最後にお花をつんでプレゼントしてくれたり、そのスウェーデンのみんなの温かさがとても印象に残っている。私も、そんな心温かい人になりたいと思った。

3.今後に向けて

今回の海外研修を通して、すごく貴重な経験をさせてもらったと感じた。その中で、たくさんのことを学ぶことができたり、仲間と思い出を作ったりとても楽しかった。しかし、一つ悔しいと感じたこともあった。それは、自分の英語でのコミュニケーション能力である。二日目のストックホルム大学の学生との交流の際たくさん話す場面があった。しかし、自分の英語力のなさで、相手の言っていることがわからなかったり、自分の伝えたいことをうまく伝えられずもどかしかった。コミュニケーションがうまく取れないということがこんなに悔しいと初めて感じた。今後は今回の悔しさをモチベーションに、英語の学習により力を入れていきたいと思った。

2025 年度現代福祉学部海外研修を通じて

専任講師 金慧英

8月30日から9月7日までの期間、学生を引率しスウェーデン研修を実施した。本研修は、海外の福祉や環境政策、都市づくりを実際に見て学ぶことを目的としており、複数の施設や地域を訪問した。各訪問先では関係者から丁寧な説明を受け、学生にとって理解を深める大変有意義な研修となったと感じている。

研修を通じて特徴的であったのは、すべての訪問先で設けられていた「FIKA タイム」である。FIKA は、コーヒーやお茶、お菓子などを囲みながら自由に意見交換を行うスウェーデン独自の文化であり、単なる休憩時間ではなく、コミュニケーションを重視する姿勢が色濃く表れている。学生たちがリラックスした雰囲気の中で積極的に質問や意見を述べ、現地関係者との交流を深めていた様子が印象的であった。このようなコミュニケーションの場が学びを深める重要な要素であることを引率者として改めて実感した。

訪問先の中でも特に印象に残ったのは、エコシティとして知られているロイヤルシーポート地区である。同地区では環境負担の低減を目的として都市設計が徹底されており、自動車利用を抑制し、自転車や公共機関を中心とした生活が成り立っていた。街全体に自転車専用道路が整備され、安全性と利便性が高いことがうかがえた。

一方で、高齢者にとっても暮らしやすい街づくりになっているかという疑問があったが、実際には、医療機関や福祉施設が計画的に配置され、必要時に5分程度で病院にアクセスできる地域システムが構築されていた。これは日本で進められている地域包括ケアシステムと多く共通点があり、住民が安心して暮らし続ける仕組みとして参考になるものであった。

今回の研修を通じて、学生たちは海外の取り組みを学び、日本の制度と比較しながら考察を深めることができた。今後も現代福祉学部の海外研修が学生の学びや成長、さらに将来の実践に活かされることを期待する。

2025 年度現代福祉学部海外研修を通じて

准教授 野田 岳仁

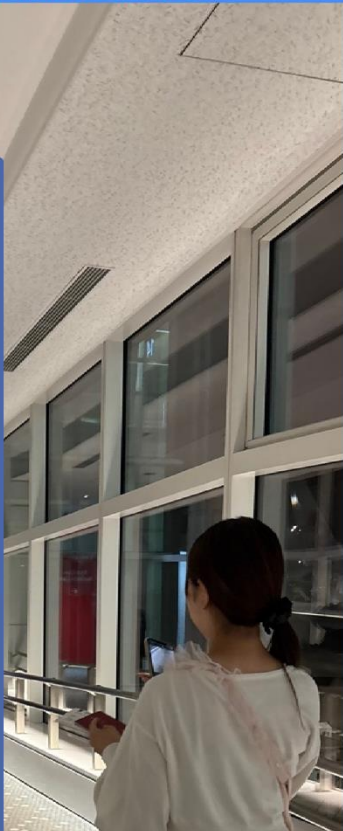
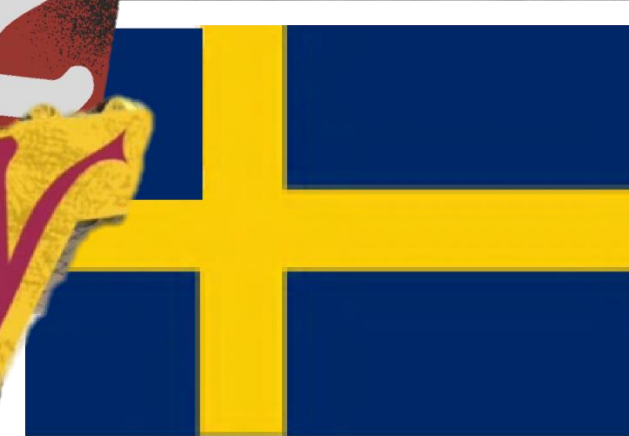
本研修を通じて強く感じたことは、スウェーデンにおける制度や支援の特徴が個別分野ごとに完結しているのではなく、人の生活を軸に横断的につながっているという点であった。福祉、医療、教育、都市計画といった領域は日本では縦割りで語られがちであるが、訪問先では子ども、家族、高齢者といった人びとの日常生活を基盤として複数の制度や専門職が柔軟に連動している様子が確認できた。

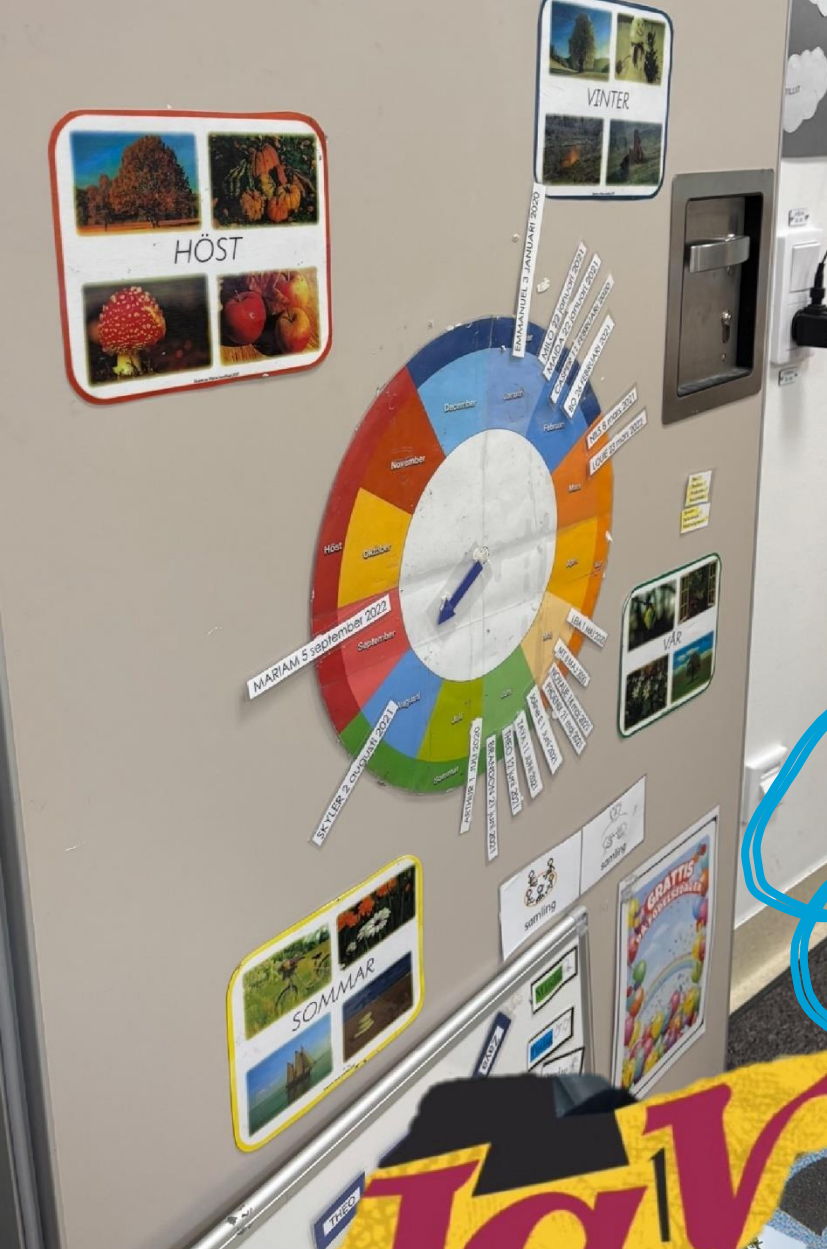
とくに子どもの支援や医療・ケアの現場においては、制度の効率性よりも当事者の尊厳や選択が優先されていた。専門職は判断を一方的に下す存在ではなく、本人や家族とともに考え続ける関係として位置づけられており、その前提の違いが支援のあり方全体を規定しているように感じられた。

こうした考え方は、個別の支援現場にとどまらず、都市や社会の設計全体にも通底していた。都市政策の視察においても、特定の政策目的の達成を前面に押し出すのではなく、人びとが自らの判断で暮らし方を選び取れるようにするための前提条件として設計されており、個人の選択を尊重する姿勢がうかがえた。

もっとも、スウェーデンでみられた取り組みをそのまま日本に当てはめることは簡単ではない。人口規模や社会構造があまりにも異なるからである。本研修を通じて印象的であったのは、制度のあり方そのものよりも、人間をどのような存在として捉え、いかなる自己決定を尊重しようとしているのか、という人間観に根ざした社会の構築のあり方であった。

本研修で得た学びは、短期的な成果として現れるものというよりも、学生のみなさん、そして引率者である私にとっても、今後の人生のなかで時間をかけて内在化されていくものとして捉えておきたい。





子どもたちが手に取りやすい工夫！

day 3

プレスクール



市庁舎



小児科病棟訪問

day

4



スウェーデンの大学生との交流



ロイヤルシーポート視察



自由行動日！



day 5



ストックホルム宮殿





小学校で一緒に給食

day 6





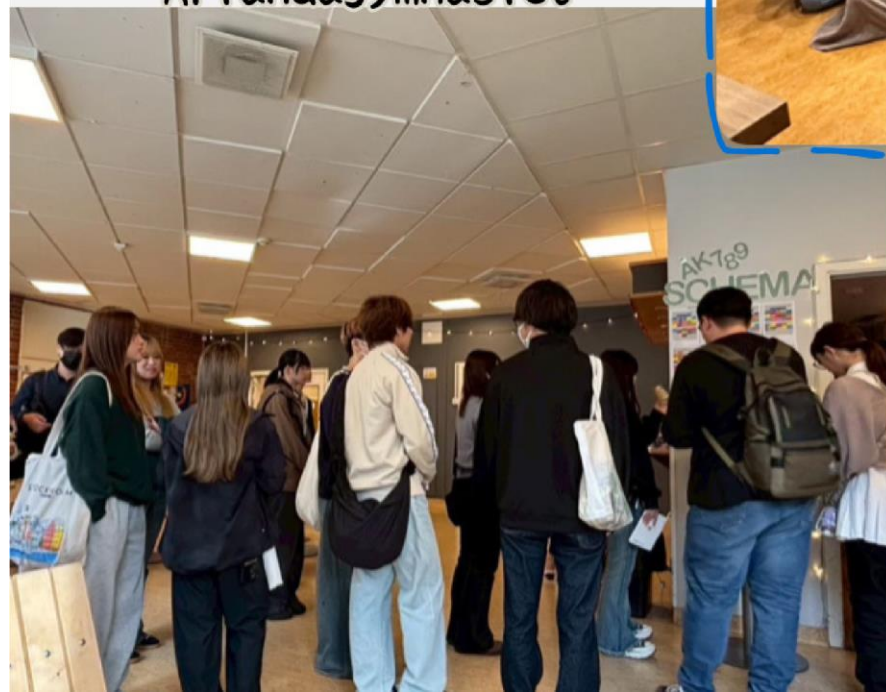
障害者のデイアクティビティセンターにて昼食！



7



知的障害者のための高等学校
Arlanda gymnasiet



トラムに初乗車><

スウェーデン

ドバイ

日本へ帰国！

day
8



FIKA